

ニュータウン人 縁卓会議

- 千里発・Newニュータウンへの再生 -

記録集



2008年 2月 16日
千里ニュータウン

目 次

1	プログラム	1
2	縁卓会議のあらまし(フォト・アルバム)	2
3	千里ニュータウンはやわかり(見学マップ)	4
4	縁卓会議の記録	5
	開会のあいさつ	5
	第一部 基調講演「千里ニュータウンの再生」	5
	第二部 フォーラム「ニュータウンの現状について」	14
5	参考資料	33
	プロフィール	33
	協賛者ご芳名、実行委員会	35

1 プログラム

ニュータウン人 縁卓会議 - 千里発・New ニュータウンへの再生 -

総合司会 藤本 輝夫

- 千里ニュータウン見学 10:30～
- 映 画「千里ニュータウン」上映 13:00～
- 開会のあいさつ 13:30～
谷川 一二（ニュータウン人縁卓会議実行委員会委員長）
- 第一部 基調講演「千里ニュータウンの再生」 13:40～
講 師 増田 昇（大阪府立大学大学院教授）
- 第二部 フォーラム「ニュータウンの現状について」 14:30～
コーディネーター：澤木 昌典（大阪大学大学院教授）
パネラー：
井口百合香（茨城県・筑波研究学園都市）
岩波 嶺雄（茨城県・筑波研究学園都市）
富永 一夫（東京都・多摩ニュータウン）
今西 實（愛知県・高蔵寺ニュータウン）
勝本 竹彦（京都府・洛西ニュータウン）
中村 信夫（奈良県・真美ヶ丘ニュータウン）
大海 一雄（兵庫県・西神ニュータウン）
入江 一恵（兵庫県・明舞団地）
古谷 學（大阪府・香里団地）
西上 孔雄（大阪府・泉北ニュータウン）
川竹 了（大阪府・狭山ニュータウン）
日下 恵子（大阪府・国際文化公園都市＜彩都＞）
奥居 武（大阪府・千里ニュータウン）
谷川 一二（大阪府・千里ニュータウン）
山本 茂（大阪府・千里ニュータウン）
- 第三部 交流会 17:00～

主 催：第2回ニュータウン人縁卓会議実行委員会

後 援：大阪府、吹田市、豊中市、千里ニュータウン再生連絡協議会

日 時：2008（平成20）年2月16日（土）10:30～18:30

会 場：千里藤白荘（吹田市藤白台5丁目11-1）

2 縁卓会議のあらし（フォト・アルバム）

順序は 方向

 <p>千里ニュータウン見学参加者を待つ</p>	 <p>出発</p>	 <p>展望台へ</p>
 <p>説明に忙しい</p>	 <p>千里ニュータウンから箕面の山</p>	 <p>会場の千里藤白荘へ到着</p>
 <p>案内の看板</p>	 <p>受付</p>	 <p>書籍等販売コーナー</p>
 <p>縁卓会議スタート</p>	 <p>開会あいさつ</p>	 <p>報道陣もいっぱい</p>
 <p>増田先生の基調講演</p>	 <p>スライド</p>	 <p>フォーラムがスタート</p>



コーディネーターの澤木先生



参加者(西上 日下 富永)



参加者(入江 井口 勝本)



参加者(今西 岩波 奥居)



会場風景



会場風景



参加者(谷川 古谷 中村)



参加者(山本 川竹 大海)



フォーラム閉会あいさつ



交流会スタート



吹田市長あいさつ



料理



乾杯



交流会風景



交流会閉会あいさつ

3 千里ニュータウンはやわかり (見学マップ)

千里ニュータウンはやわかり

■面積: 1160ha ■大阪府企業局が建設 ■入居: 1962-1970 (佐竹台からほぼ逆時計回りに開発)
 ■都心から15km (梅田から電車で20~30分程度)
 ■3つの「地区」、12(吹田市8、豊中市4)の「近隣住区」からなる
 ■戸建住宅+集合住宅(A・府公社、B・府営、C・UR、D・社宅等)
 ■人口: 15万(計画)→12.8万(ピーク)→9万(現在) ■65歳以上高齢化率: 27%

(3. ひがしまち街角広場)
 近隣センターの空店舗を改装し、市民の自主運営で維持されているコミュニティスペース。音楽、NPO、学生、研究者が自由に出入りする。

2. 建替が進む西町、東町
 千里中央に近いので、集合住宅の更新が一歩進んでいる。全員一致で建て替える前から最末期までやった例まで...

1. 更新が進む千里中央
 千里NTだけでなく「グレーター千里」の中心。商業施設はNT外のショッピングモールと、オフィスは都心と競合が激しくなり、地区センター内に住宅を導入する再開発が進行中。

10. マンションに変わる社宅群・古江台
 1990年頃から社宅の売却が相次ぎ、いちはやくマンションに変わる。景観の変化を懸念する声もあるが、若い世代が流入し、社宅群がある住区は活性化されているのも事実。

9. 近隣センター再生・藤白台
 改めた近隣センターを市街地再開発事業として再建。商店をコンパクトにし、市民ホールと子育てサービスセンターを併設。上層階をマンションとした。

4. 万博も見える千里中央公園
 吹田市と豊中市のほぼ境界に位置する。NTと万博が一望できる場所として、昭和天皇、佐藤首相...多くのVIPが訪れた。

5. 初期開発の府営住宅
 建替が早い。千里に特有の「団みどり家屋」が随所に見られる。

6. 最初のNTの最初の町・佐竹台
 公社住宅の第一号建替が2007年完成し「再生まちづくり」を行った。引続き第二号工事が進行中。

8. NTの「除外地」上新田
 江戸時代以来の集落。NT開発時に200戸あまりの人家があったため、計画から除外された。マンション開発による景観が著しい。

7. 大阪市内と結ぶ大動脈「新御堂筋」
 道路の真ん中を北大阪急行があり、御堂筋線に直結。千里中央から梅田まで19分。新大阪まで13分。

4 縁卓会議の記録

開会のあいさつ

谷川 一二

ニュータウン人縁卓会議
実行委員長



今日は、千里ニュータウンへ、ようこそおいで下さいました。実行委員長を務めます谷川です。

一昨年（平成18年）の10月、多摩ニュータウンで第1回ニュータウン人縁卓会議が開かれました。その際、今回は平成19年に千里ニュータウンで開催することが決定されましたが、紆余曲折があり、本日開催にこぎ着けることが出来ました。このために、様々な市民活動団体、吹田・豊中両市の自治会、個人の立場で参加いただいた行政の方々、献身的に動いて下さった実行委員など、多くの方々のご協力をいただいたことに、心からお礼を申し上げます。

今回の縁卓会議には、12の大規模なニュータウンと団地の方々が集まってくださいました。今日の午前中は、バスに乗って千里ニュータウンを見学しました。参加者の方が「建替えや再生などに関して、千里が自分たちの街のある種のモデルになるかもしれない」と話される声が耳に入ってきて、私はそれだけでも縁卓会議を開催して良かったと思いました。これからの時間は、増田先生から基調講演をいただき、その後のフォーラムでは澤木先生にコーディネーターを務めていただき、各ニュータウンの現状や活動の紹介と意見交換を行っていただきます。この縁卓会議が今後の全国のニュータウンのまちづくりや文化の発展に少しでも寄与することが出来れば、これに過ぎたる喜びはありません。

参加者のみなさまが、今日一日、思う存分交流を深めていただくことを祈念し、開会の言葉とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

司 会

ありがとうございました。第1部の基調講演をただいまから始めさせていただきます。大阪府立大学大学院教授の増田先生に、千里の再生についてお話していただきます。よろしくお願いいたします。

第一部 基調講演「千里ニュータウンの再生」

増田 昇

大阪府立大学大学院教授



はじめに

基調講演を頼まれたとき、20～30人の縁卓を囲む会議かなと思って気軽にお引き受けしました。これだけ熱い思いをもたれた方々の中では、少々役不足かと思いますが、よろしくお願いいたします。

私は、大学院を出た後、日本のニュータウン計画を先駆的にやっていた市浦都市開発建築コンサルタンツで約8年実務をして、畳10畳ぐらいのニュータウンの図面も描きました。当時、北千里の地区センターにあった事務所に8年余り勤めました。当時は、丘陵部の二次林、今で言う里山を剥ぎながらニュータウンをつくりましたが、それを反省して今の現職へ戻り、緑地環境科学という緑を守る側の研究や教育をしています。

もう一つは、市民参加による千里ニュータウン再生指針の作成に向けて提言する懇話会があり、そのメンバーになりました。こういう2つの点から、今日講演を頼まれたと思っています。

ランドスケープは、風景や景観と訳します。私は、生命環境科学研究科に所属しますが、旧農学部の造園学（ランドスケープ・アーキテクチャー）が基本の学問であり、風景建築や風景設計が専門です。今日は、主にランドスケープや緑を通じた話をしたいと考えています。

もう一つ、千里ニュータウンの再生指針を検討していく中で、再生はネガティブであり、もっといい言葉がないかと議論しているときに、バイタリティが少し落ちているので、バイタリティを復活しよう、再生よりリバイタリゼーションがいいんじゃないかと議論した経緯があり、本日のテーマにリバイタリゼーションを用いました。街ができてから30～40年のニュータウンであるが、再生と言うにはやや早過ぎる。まだまだ成長過程にあると言ってもいいと、再生よりリバイタリゼーションをタイトルにさせ

てもらいました。

今日は、私の立場からは網羅的な話ではできませんが、緑やそれを支える人々というような視点から話したいと考えています。

千里ニュータウンの特徴

< 緑を剥いだ開発 >

大阪府が1970（昭和45）年に発行した千里ニュータウンの建設誌を見ると、懐かしいと思う一方で、竹林や里山を剥いでつくった、赤茶けた砂漠みたいな街だったこともよく分かります。



開発完了時の千里ニュータウン

いろいろなニュータウン計画の中で、千里ニュータウンは、比較的丘陵の地形が緩やかだったことから、現況林を残さずに、むしろ剥いで新たに緑をつくったニュータウンです。それに対して、泉北ニュータウンは、どちらかという尾根筋の現況林を残しながら造成して出来たニュータウンです。2つのニュータウンは兄弟関係にありますが、造成の仕方に大分違いがあるのです。しかし、現在の航空写真からは、赤茶けたニュータウンが緑豊かなニュータウンに変わっていることが一目瞭然で分かります。

< 開発の概要 >

皆さんご存じのように、千里ニュータウンは当初、3地区12住区、人口15万人のまちとして計画されましたが、人口は最大で13万人弱ぐらいしか張り付きませんでした。大阪府企業局によって、当初は一団地の住宅経営という手法で開発されましたが、これでは大規模なニュータウン開発はできないということが判明し、新住宅市街地開発法が整備されて、計画が進んでいきました。しかし名前が示すように、産業用地をとることができなかったのです。ヨーロ

ッパのニュータウンと違って、日本のニュータウンは住宅政策の中で、住宅供給を中心に開発された。ヨーロッパのニュータウンは、既存都市の郊外に産業用地を含む形で発達しましたが、日本はベッドタウンとして発達したのです。そのため、今になって功罪があるのです。

大阪府和泉市のトリヴェール和泉には、新住宅市街地開発法の改正の後、関西国際空港関連の需要にこたえる形で産業用地が入り、大阪府産業技術研究所も立地しています。千里ニュータウンは、住宅地に特化している点が大きな特徴です。

< 近隣住区理論に従った施設配置 >

千里ニュータウン開発当時の土地利用計画図から分かるように、小学校区を基本にした住区、2つの住区で1中学校、2つの中学校区を基本に地区をつくり、その拠点として千里中央、北千里、南千里の3つの地区センターがつくられています。近隣住区の可能性と限界のような話をあとでしますが、近隣住区理論に従って建設されているのが大きな特徴です。

< 充実した公共施設 >

もう一つは、公共施設が非常に充実していることです。公共施設は、道路が16.9%、公園緑地は20%、その他6.1を足しますと、公共用地が43%もあります。千里ニュータウン以降に建設・計画されたトリヴェール和泉や彩都などでは、公共用地はこれだけ担保されていません。後のニュータウンになるほど可処分用地が増え、公共用地は減っています。千里ニュータウンでは、公共用地が40%を超えるのは大きな資産です。



建設当時の大阪中央環状線

私は、トリヴェール和泉の開発計画に携わりましたが、公園用地率を10%ぐらいまで下げ、宅地販売

できる用地を増やす計画をつくらざるを得なかったのです。それに対して千里や多摩で公共用地が担保されているのは、大きな資産です。千里ニュータウンは、都市基盤施設の面でも世界的にも誇れると思います。

<道路体系>

千里ニュータウンでは、住区内の住区幹線は直行していません。近隣住区論で言われた通過交通を排除して、小学校区の中を歩いて安全に暮らせることを基本につくられた道路体系です。後続のニュータウンでは、グリッド（格子）型になっているものがあります。

住んでいる人にとっては、どちらが分かりやすいのかと、当時よく議論しました。慣れていないタクシー運転手に「梅田から乗って、東町何丁目のどこへ行ってくれ」と言っても、なかなか行ける人がいない、分かりにくい道路体系です。しかし、住んでいる人にとっては、むしろ分かりやすい。道が曲がっていること、おのおのの曲がり角に個性があることは、かえって分かりやすい。訪ねてきた人に口で説明しにくいだけで、住んでいる人には、非常に分かりやすい体系だと思えます。それが道路のもっている体系の面白さです。

<公園緑地>

これは私の専門ですが、これだけ理想的な公園配置論を展開しているところは、日本の都市の中ではニュータウンを除いてありません。近隣住区論では徒歩圏は500mですので、長辺が1kmの住区の中心部にある近隣公園へ、すべての人が歩いていける。街区公園（昔の児童公園）は、街区での日常的な歩行距離（誘致圏）を250mとして整備されています。この頃、高齢者の連続歩行距離のことが言われており、体力が低下した高齢者は250～300mで一度座って休憩するようになりますが、街区公園はまさに250mピッチでつくられている。

<歩行者ネットワーク>

歩行者専用道という歩車分離の仕組みも、功罪相半ばしているかもしれません。夜明けから日没まで

は、通勤・通学・買物やレクリエーションなどに気持ちよく歩けます。一方で日没後は、車が通らず、人気も少ないために、社会情勢が悪化する中で、「痴漢出没注意」の看板に見られるような問題が出てくる。しかし、歩行者ネットワークの仕組みは大きな財産です。



こぼれび通り(新千里東町)

<道路、街路樹>

大阪中央環状線は、でき上がった時はわくわくしましたが、今は砂漠のような感じがします。千里2号線は、まだ樹木が勝っている感じではないですが、現在の千里中央線は豊かに緑が成長している。ただ、植物成長にとって好ましい関東ローム層が基盤の首都圏に比べると、樹木の成長量は1.5倍ぐらい少ないと思います。大阪平野に面した丘陵部には大阪層群があり、その下に強酸性の粘土層があるために樹木の成長が抑制されますから、千里の木は大きく育っていると言いながら、関東などと比べると成長は緩やかです。大学もそうで、首都圏の大学では木が隆々と育っているのですが、関西の大学ではなかなか育っていないのは、土壌の条件があるからです。それでも、こういう緑の美しい街に変わっているのです。



千里南公園(建設当初)

新千里東町の緑道は、昼、レクリエーションや健康のために歩くには最適の空間です。千里南公園は、当初わくわくしたのですが、今見るとやや閑散とし

ていたと思います。現在、樹木が豊かに成長しているのは、大きな資産だと思います。

<グレーター千里>

千里のもう一つの特徴や有利性として、グレーター千里があります。大阪大学（吹田キャンパス、豊中キャンパス）、国立民族学博物館などの高等教育・文化・研究機関が周辺に近接している「グレーター千里」と呼べる文化圏を形成しつつある。

バイオサイエンスの拠点のある彩都が開発され、千里中央にはライフサイエンスセンターがあるなど、ライフサイエンス機能が集積されつつある。大阪国際空港に近接し、新幹線新大阪駅に15分で行けるなど、国土軸上にある利点があります。私が住んでいる泉北ニュータウンと環境は似ていますが、千里ニュータウンは国土軸上にあり、文化・学術・研究機関が近接する文化圏を形成しつつあることが大きな特徴です。



グレーター千里

千里ニュータウンの課題

<人口減少と高齢化>

少しずつ課題に入り、大きく3点について話したいと思います。ひとつは、高齢化が進行し、住宅・施設の老朽化が進んでいることです。人口は、1975（昭和50）年に最大でほぼ12万9千人でしたが、徐々に減少して平成17年は約9万人弱です。65歳以上の高齢化率は26.1%と、全国平均の20.1%から6%くらい高い状況です。

これは弱みか強みかと、先ほど谷川委員長も言われましたが、2025年の日本の人口構造は約1/4が高齢者ですから、千里はこれを先取りして、高齢社会のひとつの解決方法を提案できる可能性もっている。私は、弱みと強みは裏合わせで、強みが翌日は弱みになり、弱みが突然強みになると思っていますが、26%の高齢者がいることは強みでもあるわけです。

ひとつの例として、私はいろいろな街の総合計画をお手伝いすることがありますが、昔のように右肩上がりて人口はこれくらいまで、12万人を15万人にしますと言えない。かといって首長は、12万人より10万人になりますという数値はなかなか出せない。そこで私は、地域内の時間消費量×人口にされたらどうですかといつも言うのです。千里ニュータウンが若い頃は、大阪市内で時間消費されている人が多くて、千里のニュータウンで使う消費時間は、寝る時間を外せば4時間くらい。ところがリタイアして千里にいると16時間使える。一人で4倍の時間量を使うので、人口が少々減っても全然問題じゃない。時間消費量を掛けたら、ものすごく可能性があると考えられないかということです。

小学校・中学校の児童・生徒数が徐々に減り、今はマンションブームで少し人口が回復しつつありますが空き教室がぼつぼつある状態です。しかし空き教室は、そういう場所をどう活用できるかの裏づけになるという意味で、強みでもあります。

<更新期を迎える公的賃貸住宅>

公的賃貸住宅は、いよいよ更新期を迎えています。



マンション供給戸数の推移

開発当初の公的賃貸住宅は、全住戸の約6割を占めているのが千里の特徴です。府営・市営住宅、都市再生機構（旧日本住宅公団）、大阪府住宅供給公社の賃貸住宅が全住戸の6割近くあり、分譲集合住宅や給与住宅はわずかです。公的賃貸住宅の比率は、現在もほとんど変わっていません。住宅の戸数が世帯の数を上回る我が国では、会社が住宅の面倒を見る必要はないと、給与住宅がほとんどなくなり、それが民間のマンションに変わっているのが大きな特徴です。今後、公的住宅の建替えによって生まれ

る余剰地に民間マンションが建設される可能性はあります。民間マンションが増えることは、新たな居住者を迎えて環境をどう形成していくのかという課題でもあるわけです。

住宅更新における他事例から見たアイデア

住宅更新における他事例から見たアイデアとして、学生の考えた提案のような話をしたいと思います。

< 関目団地：記憶の保全 >

これは大阪市旭区の関目に1971（昭和46）年に建設された都市再生機構（旧日本住宅公団）の賃貸住宅団地の建替え事例です。緑が大きく育ったので、その風景的記憶のようなものを継承しながら建替えることに、公団が真剣に取り組まれた事例です。建設当初は、プレイロット、動線があって、木はぽつぽつあるだけですが、35年たつと緑が大きく育っています。

これは、建替え後の現在の様子ですが、みんなの記憶に残っていた歩行者動線とプレイロットが残されています。これは新築の建物ですが、すくすく育った木を苦労して残しながら建替えられた事例です。

保存樹や移植樹、移設されたお地蔵さん、位置が継承された歩行者通路や広場などが残され、建物の完成直後には、既に整った風景ができ上がっています。新規の樹木を持ってくると、千里ニュータウン開発初期の砂漠のような風景が出現するのですが、住民が大事にしていた動線と一体的に広場を残すことによって、落ちついた環境が整うのです。

残した樹木の価値を評価するために、戻り入居や新規入居の方に「団地の中で一番好きな風景はどこですか」を尋ねたら、残された木などがあげられています。そういう意味で、木を残しながら建替えをすることの意味は大きい。今は変革の時代と言われていますが、阪神淡路大震災の後、みんながどういうことを考えたかということ、いろいろな意味での断絶や分断が起こることの怖さです。何らかの意味で変革は必要でしょうが、継承しながら変革をしていくこと、風景の断絶をなくさないでやっていくことが大切です。残した樹木には、生活行動と関係づけられた意味がある、お地蔵さんを含む風景も文化的

な背景として好きですよということは、戻り入居の方々だけでなく、新規の居住者にも高く評価されています。こういう取り組みです。



建替え後に残された大木

千里や多摩では、60%の建蔽率、200%の容積率以下で建てるという法律的枠組みがありますが、開発当初の団地は建蔽率30%、容積率80%ぐらいであり、豊かな緑が成長しています。それを建替えによって、60%、200%まで目一杯使おうとすると、30~40年間育った木や風景の断絶が起こるので、避けてほしいと思います。

< 新千里北町団地：階段室単位の継続的な更新 >

これは、千里中央から北に上がった新千里北町の公団賃貸住宅の建替えに向けて、学生はどう考えるかという演習の成果です。団地の中にある石積み、レベル差のある地形、樹木などを残しながら建替えがどうできるかが大きな課題でした。

階段式の住宅ですから、階段室単元にコミュニティが形成されています。学生は、階段室の仕組みを残して、もとのコミュニティを基本にしながら建替えすべきだという提案をしました。

こういう大きな2つの考え方にあわせて、10数年かけて少しずつ建替えませんかという提案も行いました。低容積なので日影的にも可能性があるだろうと、最初の1棟の方々は地区外へ住んでいただき、空いたところを7~8階に建て替えて、階段室単位で戻っていただく。そういうふうに、皆がコミュニティの中心として意識していた場所を残し、少しでも高層化しながら建替えていき、最終的には四隅に森を生み出しながら生活を支えていけるのではないかという提案です。

高齢社会の中で成立する産業や成長する産業は、旅行産業とガーデニング産業と言われています。

人々の緑との接触機会が求められることから考えると、もともとあった中央広場に階段があるので、段々畑的な風景を再生する、皆がお花見を楽しんできた風景を残す、もう少し積極的に緑地帯に連続する虫取りのできる森が再生できないか、森の中で読書を楽しめる生活ができないか。コミュニティの単位を基本に建替えていく中で、こういう仕組みが考えられないだろうかという学生が考えたのです。できるかどうか、難しい面もありますが、こういう視点をもつことは大事だと思います。



新千里北町団地更新イメージ

エコシステム・アプローチ

いろいろな都市の再生で語られている、「地域共同社会」「環境」「経済性」の3つが連関しないと再生できないというエコシステム・アプローチです。

共同社会（コミュニティ）と環境があり、いろいろなコミュニティ活動がありますが、持続が困難です。サステナビリティ（持続性）は、環境と経済性がクロスするところにある。市民活動でやっている環境と地域共同社会の間には、リパブルという、生き生きしていることがある。もう一つ、建替えなどに大事なものは、地域共同社会と経済が成立していくと、Equitable（公平性）という、ある操作性をもって変えることができる。お金がないと、Equitableがない状態です。この3つをどう達成しながらコミュニティや環境を再生していくかが求められるのですが、なかなか難しい。千里ニュータウンの再生指針では、基金の問題や資金の仕組みにも言及されていますが、そういうことが非常に大事です。

<デービス：サステナブルコミュニティ>

アメリカでは、現在、コミュニティ再生やサステ

ィナブルコミュニティが叫ばれていますが、これはカリフォルニア州デービス市のビレッジホームズにおける戸建住宅地開発の事例です。マイケル・コルベッドがニューアーバニズムの考えに基づいてつくった団地ですが、共同空間を基本に環境へ適合していく話と、共同空間を基本に経済的仕組みを生み出す仕組みです。

これは、専有地が72%あり、あと道路、公園等が大体30%という、デービス市の標準的な戸建て住宅です。これに対してビレッジホームズでは、専有地は43%、残りは共有地であり、居住者農園やコモニアエリアをもっています。こういう共有地を生み出してコミュニティを緊密にし、経済的な仕組みを増やしている。

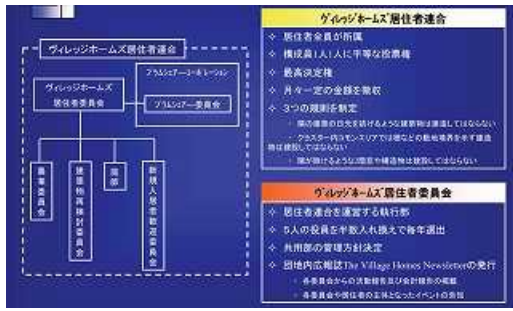
経済的仕組みは、240軒ほどの戸建ての住民が株主になったプラムシェアコーポレーションという会社をつくり、共同住宅を経営する、居住者農園で採れたぶどうを販売する。好環境の環境を維持するために管理費もかかるが、それを生み出す仕組みをつくっているという、環境、コミュニティ、経済をひとつの住宅地の中で一体的に展開しています。芝生の空間、居住者農園、ぶどう園、柿がりなど、こういう環境が居住者によって維持されています。



ビレッジホームズの環境

人が歩く道は、顔を合わせたら挨拶するように、幅員は1mぐらいです。山ではすれ違うときに「こんにちは」と挨拶するが、街中ではなかなかしない。しかし、こういう1mだと挨拶をします。これはバイク・自転車道です。

面白いのは、ビレッジホームズ居住者委員会があり、構成員一人一人は平等な投票権を持ち、5人の役員を半数入れかえで毎年選出しながら、委員会とプラムシェアコーポレーションの経営陣をつくっている。



居住者委員会

もう一つ面白いのは、新規入居者歓迎委員会です。定着率は高いのですが、転勤等で年間何戸かは替わります。新しく入ってきた人がコミュニティに入り、互いにコミュニケーションをとりながら価値観を共有できるよう、新規入居者歓迎委員会がつけられている。

環境管理者や生活者としてのコミュニティや環境を達成しています。環境は、日本の戸建住宅と違い、平等に太陽光を共有しようとの考えに基づいて、道路のあるなしに関係なく、隣棟間は全部同じです。太陽光発電が大分使われていることもあり、太陽光を平等に浴びましょうという考えです。

塀や柵を使わずに、敷地を緑でつなげるエコロジカルネットワークも進めています。マイケル・コルベッドが2000年に評価を行い、ここで育った子どもが有用植物（食べられる植物）を知っている割合は、街中で育った子どもよりも高いと報告しています。ハイテクとしての太陽光発電とローテクとしての自然との共生が大切にされているのです。

緑の多面的な活用

そう考えていくと、緑はそこにあるだけで意味がある。スポーツやレクリエーションに使うという意味もあるが、千里にある緑は「存在している緑」として効果があります。これからの緑は、近くの街区公園の中でガーデンパーティをするなどが考えられますが、そういう形ではなかなか使われていません。緑そのものよりも、緑を使ってコミュニティや文化の交流につなげる、生活の中で自然を学習したり体験する、あるいは緑の中で福祉的なつながりをつくる、もっと言えば商業的な展開まで使えないかと考えるのです。

今ある千里の緑は、ポテンシャルとして非常に高

い価値があるのですが、なかなか使いこなせていない。いろいろな管理上の問題や行政上の問題があって、団地の緑すら使いこなせていない状況ですから、こんな形で緑を使いこなすと、もっと豊かな戸外居住が楽しめるのではないかとということが2点目です。



みどりの機能

近隣住区のメリットとデメリット

<歩いていける近隣センターの可能性>

青山台の住区と、このもとになったアメリカのC・A・ペリーの近隣住区論における、幹線道路で区切られた小学校区です。アメリカでは、1920年代に人口が都市に集中し、知らない人ばかり住むようになって、コミュニティが希薄になった。そこでコミュニティをどうつくったらいいかと考え、1つは小学校区を基本にしようとなった。PTAを通じて知り合う、子どもを通じて知り合うのが一番大事ということです。1920年代は、車が普及しましたから、通過交通を排除するために、非常に分かりにくい道路体系になっています。通過交通を排除して、小学校区の中の日常生活圏は、基本的に歩いて安全に暮らせる街が目標とされています。さらに中心に小学校、近隣公園、公民館などをつくってコミュニティを形成しようとした。

店舗は、日本では住区の真中にありますが、ここでは周辺部にあります。ペリーの近隣住区論で言われたのは、商業施設には広域的購買圏が要るから、幹線道路沿いに置くべきだということです。それ以外は、真中に公民館、小学校、公園があり、通過交通を排除しているのも同じです。唯一、近隣センターの置かれている位置だけが違うのです。千里ニュータウンがつけられた頃は、車社会がこれほど発達すると読めなくて、むしろ歩いて500mで行けること

の方が重視されて、真中に近隣センターがつけられたと思われます。

これだけ車社会が発展し、大型冷蔵庫が普及すると、毎日買物に行かなくなってしまう。商圈が閉じ込められているので、近隣性の商業機能が低下していくという課題を生み出した。ただ資産として見たときに、車を乗られなくなった後期高齢者でも、500m歩けば買い物ができ、生活できるのは大きなメリットです。近隣センターは、ある部分課題だったわけですが、反対に歩いて暮らせる街づくりのために再生できる可能性をもっていると考えます。

<近隣センター活性化のイメージ>

泉北ニュータウンの近隣センターの活性化方を議論したときの資料には、画一的な街、閉鎖的、自己完結型、流通環境や車の普及に対応できていないなどがデメリットとしてあげられました。一方で、全ての近隣センターが自己完結型で同じであるよりも、むしろ違う機能を持ったもの同士で連携できれば、活性化ができるのではないかという意見もありました。

ただし、どの近隣センターも基本的に備えるべきものと、違う個性を持つべきものがある。基本的な機能として、給食の出前、電気製品の修理などの出前（コンシェルジェ）、ホームドクター、ヘルスケアのような機能は基本的に備えてほしい。

もう一つは、社会情勢が変化の中で、タウン・セキュリティ、コミュニティタクシーやコミュニティバスのようなモビリティを支える機能を備えて欲しい。加えて、泉北ニュータウンの周りで採れる農産物の朝市ができるスペース、若い人のアート活動ができるスペースの整備などによって個性化を図り、活性化できないかという議論をしました。

<パリの市場の活性化例>

パリ郊外にある、1970年代にできた近隣センターの建替えです。恒久的な固い建物をつくらずに、人間本来の市場の形態をめざしています。パリらしい斬新なデザインですが、初期投下はほとんどせず、安価な覆い屋根をつくり、中に市場が発生して、市民の生活を支えているなど、フレキシビリティを担

保しながらの再生を展開しています。

こういう市場に行って買い物をすると、楽しくて仕方ないですね。これが成功すると、周りに同じような店舗が張り付いて、非常に魅力的な環境がつけられる。日曜日、駅前には閑散としているのですが、みんなぞろぞろ歩いていく方向へ行ったら、こういう市場だったという事例です。



パリの市場

<青山台近隣センターの活性化イメージ>

青山台の近隣センターの横に街区公園があり、物すごくきれいな斜面林があります。近隣センターの活性化に関する学生の提案です。近隣センターはやや低迷し、公園も忘れ去られたような状態にあります。小学校、近隣センター、公園の間には、物すごく段差があるから垂直移動しにくいので、細長いセンターをつくり、建物のエレベーターを使って、段差を解消しながら移動すれば、通勤や散策の楽しいルートになり、歩く行為がもっと発生するのではないか。近隣センターには駐車場は要りません、むしろ歩いて行ってもらったら、近隣センターも公園も活性化する。豊富な緑や起伏に富んだ地形が生かし切れていない、段差解消と同時に自然を楽しむ、散歩を楽しむ、会話を楽しむ装置を導入して近隣センターを建替えたなら、住民のコミュニケーションが活発になり、地域も活性化していくのではないかという提案です。

北千里駅と街を結ぶ、この段差の4つのステージを結ぶ、斜面林と小学校へ街が広がっていく、こういうことを考えていったら、次への展開も見えてくるのではないかということです。つなぎ空間としての開かれたスペース、斜面林に伸びる大きな大屋根です。道路はなくて、グラウンドと一体化して展開

をしていく。斜面林の中に個人の図書館や展望台をつくり、商業施設が公園の中に入り、公園が商業施設の中に入ることによって、環境としての総合的な価値を高めることができる。こんなことを学生は考えるのです。



青山台近隣センターの再生イメージ

歩けば500mで近隣センターにアクセスできると考えたら、そういう可能性も出てくる。都市計画公園だから使えない、近隣センターは区分所有や一団地の総合設計などがかかっているから使えないなど、現実的な問題はいろいろありますが、それを取払って発想を豊かにすれば、展開の可能性が考えられます。

千里ニュータウン再生指針

谷川さんをはじめ、市民の皆さんの参加によってまとめた「千里ニュータウン再生指針の策定に向けた提言」が手元にあると思います。ディスカッションの題材にもなりますので、参考に見ていただければと思います。どうもありがとうございました。

取り組み方針	
	1. 住環境をまもり・つくるルール
	2. 地域の賑わいや交流の場づくり
	3. 柔軟な利用が可能なスペースの確保
	4. 近隣センターの活性化
	5. 多様な世帯のニーズに対応した住宅供給
	6. 公的賃貸住宅ストックを活用した多世代居住の推進
	7. ライフスタイルに応じて住み替えられる仕組み
	8. 住民・事業者・行政の協働の場の設置
	9. 行政や住宅事業者の連携
	10. まちづくりに貢献する住宅の更新
	11. 歩いて暮らせるまちづくりのための交通環境整備
	12. 緑の保全と活用
	13. 公共施設の点検
	14. 地域の防犯・防災力の充実
	15. 子育て・高齢者サービスの提供
	16. 地域と大学の交流と連携
	17. 生活文化の継承と発展
	18. 情報の蓄積と連携
	19. 千里ニュータウン再生を担う人づくり
	20. 千里ニュータウン再生を推進する仕組みづくり

千里ニュータウン再生指針の策定に向けた提言(取り組み方針)

第二部 フォーラム「ニュータウンの現状について」

澤木

ただいまから第2部のフォーラム「ニュータウンの現状について」を始めます。今回は12のニュータウンが集まっていますが、私も神戸の北にある「神戸三田国際公園都市」...昔は北摂ニュータウンと言っていた...に住んでいるので、13番目のニュータウン代表と言っていると思います。会議のテーマは「千里発・New ニュータウンへの再生」ですが、フォーラムのタイトルは「ニュータウンの現状について」となっているので、それぞれのニュータウンがどんな現状にあるのかをお話しいただきながら、問題点や解決策について意見交換できたらと思います。



まず皆さんに自己紹介、わが街紹介をしていただき、その後、大きく3つのテーマで話題交換ができたらと考えています。

1つめは、先ほどの増田先生のスライドにも高齢化の問題がありましたが、ニュータウンの人やコミュニティの再生をどう考えたらいいか。

2つめは、人ではなくて、ニュータウンそのもの、建物や街、住環境、こういったものをどう維持、再生していくのかという視点も出てくるでしょう。

3つめは、人や街の再生を支えていく市民や住民の活動、第1回の縁卓会議でも、その辺がこれから大事ではないかという話があったと聞いていますが、では再生させる市民活動のあり方や将来について。

人・コミュニティの再生、建物・住環境の再生、それを支えていく市民・住民活動、そんな3つの話題で意見交換、情報交換できたらと思います。

それではさっそく、簡単な自己紹介を、第1回を主催していただいた、多摩ニュータウンの富永さんからお願いいたします。

12ニュータウンからの最新報告

富永(多摩)

はじめまして。東京・多摩ニュータウンからやってまいりました。1年4ヵ月前の第1回縁卓会議では、とにかく山ばかりだったニュータウンに、もう

人間が住んで何十年かたっているのだから、ご縁のある人だけでも集まって課題解決ができればという非常に単純な着想で、自分たちの「えにし」のある人で、縁のある円卓会議...「縁卓会議」をやったら何かいいことが生まれるのではないかと開催させていただき、千里、高蔵寺、筑波からもおいでいただきました。



2回目は見事に千里が引き継いでくださり、3回目は5月に高蔵寺で開催されることが決まって、私はとてもうれしく、これが歴史になっていくといいなと思っています。

私は「NPO フュージョン」と「NPO フュージョン長池」の2つのNPO法人をもっています。最初に「NPO フュージョン長池」を設立しました。現在そこは八王子市の指定管理者制度にのっとり、長池公園という20haの公園の指定管理者をしています。増田先生の話にもありましたように、公園という緑の空間の活用をもっと地域のために多様・多層にできればいいと思って活動しています。

「NPO フュージョン長池」は公園を中心に歩ける距離ぐらいのコミュニティを形成しているのですが、ニュータウン全体にももう少し視野を向けなければ、「NPO フュージョン」というNPOをもう一つつくることになりました。そこは多摩市から業務委託を受けて、「多摩NPOセンター」というNPO活動の支援センターを受託して、さまざまな活動の応援をしています。国土交通省から応援いただいて、「暮らしと住まい相談センター」も運営して、暮らしや住まいの問題全般の活動も視野に入れながら活動しています。ただ自分たちは、多摩ニュータウンというエリアにしか目を向けてなかった、千里に学ぶものも多かったです、今日改めて反省しました。

日下(彩都)

彩都から来ました「彩都コミュニティ広場」の日下です。

彩都は、ここから車で10分ぐらい走れば着く、茨木市と箕面市にまたがる街です。



2004(平成16)年にまちびらきをしたので、来

月で丸4年になる、本当に新しい街です。2007（平成19）年12月末現在で、2,046世帯、5,863名が暮らしています。

千里ニュータウンもそうであったと思うのですが、最初に右も左もわからない、お隣さんもお向かいさん知らない人たちが集まった新しい街ですので、私たちの「彩都コミュニティ広場」は、そういう人たちをどんな形で横に結びつけようかと、思いつくままいろいろなことをしています。

住みに来られた皆さんは、自分たちで何かしているという前向きな気持ちの方が多いため、ちょっとしたきっかけづくりでサークルや自治会などがパッと簡単にできてしまう。今のところ大変うれしいことですが、20年後、30年後のまちづくりをどんなふうにしたらいいのか。それを考えていく上で、今回の会議が勉強になると思い、参加させていただきました。

西上(泉北)

皆さん、こんにちは。西上と申します。多分この中で一番若いと思うのですが、泉北ニュータウンができて入居が始まった1967（昭和42）年に生まれて、ちょうど40歳になります。私は「泉北ニュータウン学会」の事務局をしていて、これは2年ほど前に発足しました。そのときに多摩ニュータウンにある「多摩ニュータウン学会」の星野先生に記念講演をしていただいたのですが、今日講演いただいた増田先生も理事でいらっしゃいます。



泉北ニュータウンも皆様と同じように、少子高齢化、自治会の加入率低下など、いろいろな問題を抱えています。住民同士いろいろな取り組みを始めているのですが、なかなか専門知識がありません。地元たくさん大学の先生がお住まいということで...増田先生もその一人ですが...我々から皆さんにお声がけをさせていただいて、専門家と一緒に地域の課題についての共通認識をもって、いろいろな取り組みをしていくための勉強会をしよう。地元の桃山学院大学からも援助を受けて「泉北ニュータウン学会」を立ち上げました。

その中で一番感じているのが、ちょうど私はニュ

ータウンができたときに生まれた年代ですが、帰属意識が非常に低下している。その場所で生まれて、なかなか若い人が帰ってこない。これが一番の我々の課題になっています。それを今後どう高めていくのか、住民間でいろいろな活動をどう高めていくのか。これが我々の大きなテーマの1つです。

泉北ニュータウンは、先ほど増田先生からも国土軸から外れていると言われましたが、どんな資料を見ても、人口の減少は止められないとあります。そんな中でも、住民自身が楽しく、長生きできるような仕組みづくりができないかと。また、ニュータウン内に18の住区があるのですが、その住区が同じようなカラーでなく、それぞれが特徴をもった、当然、駅から遠いところと駅から近いところでは、住民の住まい方、高齢化率も大きく違います。こういった特徴を生かしながら、何か新しい取り組み...国土軸から外れていても住民が楽しく長生きできるような仕組みづくりができないかと思っています。

勝本(洛西)

京都からまいりました、洛西の勝本です。洛西ニュータウンは、1976（昭和51）年に開かれた、京都市が力を入れてつくったニュータウンです。4つの小学校と、2つの小さな中学校区からなる216haの非常に小さいニュータウンです。それができて30年、ぼつぼつ問題が出てくるぞと、2005（平成17）年に「洛西ニュータウンまちづくり検討会」ができました。何が問題なのか、これからどのように希望して直していったらいいのか、いろいろな街のアイデアを進めようと、1年半かけてビジョンをつくりました。



ここに持ってきているビジョンにあるように、やりたいことがいっぱいあります。実現していくのは大変だということで、今年2007（平成19）年度に実現していくための会をつくりました。「洛西ニュータウン創生推進委員会」...「再生」じゃなくて、「創生」していくという創生推進委員会が生まれ、その下に4つの実行部会をつくり、いよいよ実現に向けて活動していく段階に入りました。

いかにでき上がった街を「創生」していくか。こ

れは非常に難しいことがわかってきました。初めてつくるのは楽ですが、一度出来上がった街をどう直していくか。そこには利権がありますから、それを説得しながら直していくのは大変だということがだんだんわかってきた段階です。皆さんのご意見を伺いながら進めていきたいと思っています。

井口(筑波)

筑波から来ました、井口です。よろしくお願いたします。

筑波研究学園都市は、皆さんのニュータウンと少し違って、職と住の両方をニュータウンに入れようという考えに基づき、国立の研究所、大学が立地しています。そこに働く人たちのための街をつくるという考えでつくられたので、問題が大分違うと思います。



人口が流動的で、研究所に勤める人たちがどんどん入ってきては出ていきます。住んでいる人たちの平均年齢がかなり低いのです。高齢化問題は、そんなに表面には出ていないという違いがあると思います。前は多摩、今日は千里を見せていただいて、筑波は、良くも悪くも国がつくった街という特色もっていると感じました。今、公務員住宅がどんどん払い下げられて、民間の開発対象になっています。もう一つ大きな問題は、2005(平成17)年、つくばエクスプレスが通り、この人口減少の時代に、新しい沿線に計画人口10万人の隣接するニュータウンが計画され、最後の大開発の波にさらされているところです。

今は「筑波スタイル」というブランド化が、ある意味で成功したと思われます。筑波と言えば誰もが住みたい街というイメージがあって、一見順調に見えるのですが、本当にどこまで開発がちゃんとできるのかということは、すごく大きな問題があると思っています。

それで、今度その開発があるなら、全く新しいところにニュータウンができるのではなく、私たちの筑波研究学園都市、皆でつくってきたニュータウンのそばにできるニュータウンということで、今まで住んでいた者たちがいろいろな...「コンシェルジェ」って言葉がさっき出ましたが、その役目を果た

そうということで、一端を少しお手伝いしています。それに加えて、先ほどの講演で、増田先生にすごく興味深いお話をしていただきましたが、私自身はもともと筑波の中にたくさんある緑、公園をもっと生かさなくてはいけないんじゃないかと考えて、「女性庭師講座」を20年ほど前に始めました。公園を、近所に住んでいる若いお母さんたちの職場にできないか、仕事ができないかと考えて、それをずっとやってきたのが今の「つくばアーバンガーデニング」の活動につながっています。しかし増田先生のサステナビリティという話、その経済性と緑の管理の両立は、とても結びつけるのが難しく、今もまだ十分にいていないと思うのです。これは日本ではとても無理なのかなと思っていたのですが、そういうことを考えていらっしゃる方が他にもあると今日伺って、とても心強く思いました。

入江(明舞)

明石舞子団地、通称・明舞団地から来ました、「ひまわり会」の入江です。



私たちは、食を通した福祉コミュニティづくりを基本理念に、主に「ふれあい食堂」と配食サービスを行っています。配食サービスは、入退院を繰り返している虚弱高齢者と一人暮らしの高齢者が対象です。

明舞団地は1964(昭和39)年に入居が始まり、千里とあまり時期は変わりません。1~2年遅れだと思います。ピーク時は29,000人を擁していましたが、今では約1万人減っています。高齢化率は全体で30.2%ですが、松が丘三丁目という団地では40%を超えています。

最初のきっかけは2003(平成15)年、兵庫県が明舞団地の再生というテーマでNPOを募集し、そのときに12の応募があった中から3つのNPOが取り上げられ、私たちはその中の1つです。皆でたまり場になって、くつろぎ、ふれあう場を提供しようと考えましたが、地域のニーズに従って、どんどん広がっていき、今の活動になりました。

立ち上げる前に友人から、千里ニュータウンの「ひがしまち街角広場」を一度見学に行ったらいいよと言われ、伺ったのです。あのさんさんと輝く、

すぐそばに雑木林があって、日が照っている、チェアが置いてあって、子どもたちが「おばちゃん、お水ちょうだい」と言って、炭で浄化しているお水を、「この水はうちのよりもおいしいもん」と言って飲みに来るのですよという話...お年寄りたちがゆっくりお茶を飲んでいるのを拝見しました。どんなものをやるか、私たちは描けていなかったのですが、こういうものを考えていたのだと思いました。

「ひがしまち街角広場」を目標にして始めたのですが、千里にお伺いしてから、5年目を迎えました。この間にも高齢化率のスピードが上がり、私たちの配食サービスは、厚労省の認可をとっている配食業者ではありませんが、ただ素材を吟味して、体に優しいことを大切にやってきました。「血糖値が下がったってお医者さんに言われるんですよ」、「おたくがお休みになった年末年始だとまた便秘になりましたね」、「お弁当が再開したから、またこれでよくなります」という声が口コミでどんどん広がり、私たちはどんどん活動をしています。

そこへ明舞団地の建替え、リニューアルが始まりました。県営住宅は、完全な建替え・転居が昨年終わりました。UR・公社はまだまだ難航しています。私たちが入ったときには、その商業地域にシャッターが下りているからそれをあげよう。これは「ひがしまち街角広場」と全く同じ動機です。1995（平成7）年...ご存じのように震災の年ですが...に商業地域の2回目の大きな建替え論議が浮上したのですが、それもだめになりました。今回の3月にコンペになったのもまた難航して、6月に延期と、どんどん延びていますが、今度こそやれなかったらこの商業地域は、永遠に建替えはないだろうという意気込みで取り組んでいます。

まちづくりは、私たちが中心になり、4つの任意団体やNPOが入って、地域の支援組織と一緒に進めています。「明舞まちづくりサポーター会議」は3年目を迎えますが、そこも空き店舗のシャッターをあげるということで、地域の住民、特に高齢者や母と子のホットスペースのようなものに使われて、お助け隊というコミュニティ・ビジネスのはしりで、何かやろうと動き出しました。5年目に入り、食を通した福祉コミュニティから、そういったところへ

も手を少しずつ伸ばしていっているのが現状です。

奥居(千里)

千里ニュータウンの奥居です。私はこの藤白台に5歳のときに越してきて、以来44年この街を見てきました。ですから、ニュータウン2世ということになります。多分このテーブルの中では2番目か3番目に若いと思います。



千里ニュータウンは、第1世代の方がまだまだと言っちゃ怒られますがお元気で、第1世代の方が大体今65歳から75歳の間だと思いますが、そういった方がいつまでもお元気かどうかはわからないところがあり、やはり第2世代が頑張らないといけなと思っています。

今建替えがあちこちで始まっていて、そういうところに、大体私と同世代くらいの方々が新たに入ってきて来ます。昔から住んでいる60代、70代の方と、それから新しく入ってこられる30代、40代くらいの方を繋ぐのは、やっぱり残っているニュータウン第2世代しかないんじゃないだろうかと、突然「ニュータウン魂」に火がつき、一昨年からとにかく情報発信するしかない、街のことを書いた「アROUND・藤白台」というブログを個人的に発信しています。

建替えがあちこちで起きて、街の人心が荒れてくることがあり、そういうことはとても悲しいので...ニュータウンはやっぱりいい所だよということをとにかく書き続けているしたいです。

岩波(筑波)

筑波から来ました、岩波と申します。「CROSS つくば」という冠のもとで、「つくばアーカイブズ研究会」の活動を、ここ2年ほど続けています。



筑波は、井口さんから話がありましたように、3つめの大きな波が来ています。

1つめは1963（昭和38）年に筑波の研究学園都市の建設が閣議了解され、建設することが決まったのですが、1980（昭和55）年にかけて、国の研究所が集中的に移転してきました。そのときから筑波

の従来の住民に新しい住民が加わった、新しいまちづくりが始まったのです。

その次の波が 1985 (昭和 60) 年、千里の次の次になりますか、科学万博が開かれました。このときに筑波の名前が内外に広く知られるようになりました。国の研究所の皆さんに加え、民間の研究所がたくさん進出するようになりました。それ以前は国の研究機関が 43 だったのですが、この科学万博を契機に、現在は官民あわせると約 300 社集まっています。従来の人口は、おおむね 6 万人ぐらいでしたが、国の研究所の皆さんがおおむね 5 万人ぐらい加わって、現在約 21 万人です。

第 3 の波として、つくばエクスプレス (TX) が 2005 (平成 17) 年に開通しました。これをきっかけに、国や企業の進出と違う、言ってみれば千里と同じような住宅地としての側面が始まったのです。

こういう大きな変化の波が来ているので、この間の筑波に関わるいろいろな歴史的な資料...紙の資料だけでなく映像なども含むのですが...の散逸が懸念されるということで、非常にきつかったのですが、2 年ほど前から急遽活動を始めました。

現在やっていることは 2 つあり、1 つは古い写真を集めることです。昨年第 1 回を開催し、10 日ほど前に表彰式を行いました。

2 つめは、千里では市立博物館でニュータウン展といった活動をされているという話がありましたが、筑波には博物館はないので、筑波に関わるいろいろな資料が、現在どのように、どこにあるのかなど、基本的なことを調べることです。この 2 つの活動を始めたところです。

今西(高蔵寺)

高蔵寺ニュータウンの今西實です。よろしくお願いします。

高蔵寺ニュータウンの現況については、一昨年の第 1 回の報告書に、私たちの吉田が縷々述べ、まとめていただいていますので、お読みいただけたら、だいたいご理解いただけたらと思います。

その後、高蔵寺ニュータウンでは、大きな変化はありません。今年は、高蔵寺ニュータウンの入居が始まって 40 周年記念ということで、5 月に縁卓会



議をやると宣言していますので、この第 2 回縁卓会議からあまり日がありませんが、5 月 17 日に第 3 回を開催します。また大勢の皆さんにご参加いただくと、大変ありがたいと思っています。

最近、行政でもいろいろと高蔵寺ニュータウンの対策を考えていただいて、住民と学識経験者と行政を交えて、ニュータウン常任委員会を発足しようという呼びかけが出ています。おそらくこのまま実現していくと思います。そういう行政の呼びかけを受けて、第 3 回縁卓会議も進めたいと思っています。

中村(真美ヶ丘)

香芝市真美ヶ丘というのは耳慣れない方もおられると思いますが、奈良県の中西部に位置していて、西名阪自動車道の香芝インターから南に広がるニュータウンです。県の北端は奈良市です。



香芝市は人口 7 万人で大阪へ電車で 30 分から 1 時間の通勤圏にあり、大阪のベッドタウンとして発展しています。人口の増加率は、全国で 3 年前は 1 位、2 年前は 2 位でした。万葉の大津皇子で有名な二上山(にじょうざん)...別名フタカミヤマから、葛城山にかけての山麓に広がる平野部にあります。その中で真美ヶ丘は名古屋、伊勢方面への近鉄大阪線の五位堂駅から北に広がる平坦な丘陵地にあり、聖徳太子の時代から馬の放牧地であったことから、馬見丘陵と言われています。そこを住宅公団が戸建住宅を中心にニュータウンとして開発しました。公団分譲地と民有地が混在しています。

1983 (昭和 58) 年に入居が始まり、2 年後の 1985 (昭和 60) 年に自治会を結成しました。当時は 198 世帯です。23 年経た今は 1,300 世帯以上、人口は約 4,900 人、60 歳以上が 16%、70 歳以上は 6%です。自治会をつくってすぐ「仲よく住みよく暮らしよく」という基本理念を掲げ、「真美ヶ丘まちづくり宣言」を発し、まちづくりをスタートさせました。

その具体的なものとして、2 年がかりで「真美ヶ丘環境整備基準」を策定し、毎年 7 月に地権者、ハウスメーカー、工務店等に「基準」と「遵守と事前届のお願い」を郵送しています。基準の運用の基本

は、誰もが住みたい街、住んでよかったと言える街、自分が守れば次の人も守るです。この運用基本で、建築物のすべてに関して、事前に自治会環境整備委員会に届けを提出してもらい、審査し、話し合いをするルールを確立しました。大切にしているのは、排除の精神ではなく、受け入れの精神で事を処すということです。どんどん建ててください、ただし基準を守り、いい街並みの形成に協力してくださいと勧めてきました。その結果、戸建住宅以外は認めないというまちづくりで、30年、40年たって、「オールドタウン」、さらに「ゴーストタウン」になっている街もありますが、当自治会は2階建てで4戸1棟の共同住宅も既に50棟ほど建ち、若い世代も多く住み、飲食店やさまざまな商業施設などもあり、良好な住環境でありながら利便性も高い、永住型の賑わいのある、関西では人気エリアの1つになっています。ですから「再生」というテーマにはまだそぐわない自治会ですが、10年後、20年後を見据えたら、同じような課題が予想されるので、今日は皆さんのいろいろなご意見をお聞かせいただき、まちづくりの参考にしたいと思います。

古谷(香里)

この中で私の団地が一番古いと思います。1958(昭和33)年に第一号ができて、建替えもUR(都市再生機構)...かつての日本住宅公団が実施した第一号として、すでに完了しています。



この建替えの後、いろいろと問題があり、特に最近問題になっているのは、URが独立行政法人化して、さらに3年以内に不良財産を精算しなさいという政府の方針によって、これから建替えができなくなるのです。空き地を民間にどんどん売却しているという問題があります。先ほど増田先生がおっしゃった緑の問題、あるいは高齢者の歩く距離が500mという尺度は当然そうなのですが、民営化したことによって、一挙に年齢構成が変わってきた。子どもが非常に増えた。公団の計画は、A～Eまでである香里団地を20年で建替えようと、年齢構成を考えながらやった計画がすべてご破算になり、空いた土地を民営化したために、逆に低年齢化したのです。

低年齢化と高年齢化の間のジェネレーション・ギャップ、これが非常に大きな問題です。そこで我々はこの街をどうするか。もちろん行政の指導ですが「地域づくりデザイン事業」を提案されました。それを受けて自分たちの街を...高齢者にとっては500mで生活できる、しかも介護施設もある、病院もある非常に便利な街ですが...ところが子どもにとっては、必ずしも便利ではない。世代間交流を含めながら、高齢者福祉もそれなりに充実させながら、地域をどう活性化するか。行政が提案している「地域づくりデザイン事業」の中に提案していこうと、さまざまな活動計画を目下提案しています。

今日の議論の中で質問があれば、いろいろとお答えできますし、建替えについても、今URで先進的な建替えをしている場所なので、団地の建替えはこういうものだとは十分説明できると思います。

谷川(千里)

千里ニュータウンの谷川です。佐竹台に住んでいます。



ここは千里ニュータウンの中でも最初にまちびらきした第一号の住民が1962(昭和37)年

9月15日に入居したところであり、そういったこともあって、最初に高齢化しました。そこで「第二のまちびらき」を去年、2007(平成19)年2月に行いました。それで多少、佐竹台という名前が売れたのかも分かりませんが、紆余曲折もありました。先ほどの洛西ニュータウンの方も話をしてくれと見学に来られました。成功談よりも失敗談を話してほしいということでしたので、こんな失敗をしたと申しあげました。

私たちのところは大阪府住宅供給公社の団地ですので、まず吹田市の「ニュータウン再生指針」を守るのが大事だということで、先ほど増田先生が講演でおっしゃった、容積率は今も140%を守っています。ですから緑が非常に豊かです。高層化はしましたが、高層化は決して悪くはない、何とか建替えはやるうじゃないかと申しあげて、「佐竹台方式」という名前で、参加者が同じテーブルについて自由に意見交換する“ラウンドテーブル”を何回も行いました。反対派の方々も、1年半ぐらいかかって説得

できました。反対派の方々も賛成に回っていただいて、5つの自治会のうち3つの自治会が公社賃貸団地ですが、あと2つの分譲団地も建替えが決定しました。ですから、佐竹台一丁目は全部5年以内に建替えが行われることが決定したという、ちょっと特異な所ではないかと思っています。

そういった意味で、私たちは今後も先進事例として、何か新しいものを皆さん方に提供していけたらと考えています。

大海(西神)

神戸の西神ニュータウンから来ました大海です。

神戸の都心から地下鉄で30分行ったところに3つのニュータウンがあります。西神中央、西神南、研究学園都市、この3つを総称して、西神ニュータウンと言っています。入居が1982(昭和57)年ですから、まだ26年。千里に比べるとまだ若いニュータウンです。計画人口は11万人ですが、住民基本台帳によると98,000人で、今も少しずつ増えています。進捗率約90%というところです。事業は、この数年で終わる見込みです。

西神ニュータウンの特徴は、皆さん方のニュータウンと多分違うのではないかということです。1つめは、戦前からの非常に古い計画の歴史があることです。ニュータウンは、戦後大都市に人口が集中することから計画された所が多いのですが、我々の場合は戦前からニュータウンをつくる構想がありました。2つめは、職住近接のわが国では第1号のニュータウンになっています。すぐ横に工業団地をもっていて、約12,000人が働いています。

最大の特徴は、母都市＝神戸市が震災に遭ったことです。13年前の震災で神戸市街地は大変な被害を受けたのですが、皆さんのおかげで復旧しました。西神ニュータウンは震源地からは神戸の都心と同じ距離ですが、全体に建物が新しい、地質が良かったこともあって、被害はほとんどなかった。そのために、家族や家のことを心配しなくても復旧ができました。ニュータウンの震災記録を持ってきました。震災の記録はいろいろありますが、ニュータウンから見た記録は、これだけだと思います。ぜひ皆さん



方に参考にしていただきたいと思います。ニュータウンは、母都市が被災した場合のバックアップ機能として、これから非常に重要になるのではないかと思います。

現在の問題点は、皆さん方と同じで、少子高齢化と若者の流出が進んでいます。全体として人口は増えていますが、これは新築住宅があるからでして、町丁別に見ると、西神ニュータウンでは、全体では74丁目までであるうち、実に40丁目の人口が減っています。若者が流出しているのです。皆さん方の経験を勉強させていただきたいと思います。

「西神ニュータウン研究会」ですが、研究学園都市にある大学の公開講座でニュータウン問題を取り上げました。地元の方々の関心が非常にあり、その同窓会という形で5年前に発足しました。初めは遊び心で「ニュータウン学会」にしようかと思ったのですが、ちょっと恐れ多いので研究会にしました。毎月講師を招いて研究会を実に60回重ねています。

川竹(狭山)

狭山ニュータウンは、泉北ニュータウンから丘を1つ越えた隣にあります。丘といっても上に遊歩道があって、それを跨いだら私たちのニュータウンです。

1967(昭和42)年に南海電鉄が開発しました。当初の計画で5,000戸、2万人という規模のニュータウンです。泉北ニュータウン+私たちの狭山ニュータウン+お隣の富田林の公団住宅、その3つを繋げたら、大阪府で千里ニュータウンに次いで大きいニュータウンとして開発されたと聞いています。

全部で17の自治会があり、主に戸建住宅ですが、その中に公団と府営住宅、マンションがあり、高齢化率は全体としては27%です。ただ、その中の3つの町と周辺の2つの町の一部を合わせたニュータウン自治会...だいたい1,100世帯強で人口2,800人ぐらいですが、ここは高齢化率が37%です。明舞団地でも同じような話がありましたが、3つの町の1つは高齢化率40%ぐらいで非常に高齢者が多い。それも一人暮らし、二人暮らしの方が多くて、こういった高齢社会で私たちの活動、自治会の活動をどうしていくかが、大きな問題になっています。



特に最近では孤独死の問題もあり、お年をとられると家に閉じ込めてだんだん地域とのコミュニケーションがとれにくくなる。そういう方をどのように私たちの活動の中に入れて、いつまでも若々しくお元気で活動していただくか。これが一つの課題です。

逆に、若い人たちはなかなか私たちの中に入ってこない。入ってこないというのは、今日の話の中にもあったように、だいたい60坪以上の分譲住宅で開発が始まったので、建物を売りに出してもなかなか売れない。分筆して小さい戸建住宅にして売らないと、なかなか皆さん方が入ってこない。最近はそのような例があちこちに出てきて、街並みがだんだん崩れていく。せっかく非常に広い土地で、緑の多い所を望んで入られた方々が、分筆されて小さくなってきた、そういう住環境の変化には非常に不満を感じている。それをどうしていくかが課題になっています。生垣の住宅も多いのですが、生垣が道路にはみ出して、通行の邪魔になることもあります。

住環境が一番大きな問題ですが、もう一つはコミュニケーションの問題。私たちの住んでいる大阪狭山市では、地域自治、地域コミュニケーションを重視したまちづくりをしよう、中学校区の単位で、必要な設備の予算化・計画をしようとしています。これは来年度から始まります。そういう中で私たちみたいに年寄りの多い街が対応できるのか、非常に気になるところです。若い人たちがどんどん入ってくる状態だったらいいのですが、そうじゃない状態で地域自治を進める、地域コミュニケーションの問題にどう取り組むかが、頭の痛い問題です。

高齢化社会になって、特に今後は孤独死の問題、認知症もだんだん増えてくる。そういう方を地域でサポートしていく体制をつくるために、私たちの自治会でどうしていくのか。皆さん方の実際に経験されていることをお聞かせいただいたら、非常にありがたいと思います。

山本(千里)

私は、約30年間、都市計画・まちづくり系コンサルタントとして、千里ニュータウンの調査・研究に携わってきました。

継続的に関心をもち続けたテ



ーマは、計画的につくられた街の良さを活かしながら、より住みやすく魅力的な街へどう再生するかということです。その一環として、戸建住宅居住者の定住意向に関する調査を行ったら、夫婦や単身で広い家に住みながら、住み続けるにも、住み替えるにもいろいろな問題をかかえている実態が分かりました。結局は居住者が安心して楽しく住み続けられることが一番重要ではないかと思い、仲間呼びかけて、高齢者の住まいのサポート等を目的とする「千里・住まいの学校」を約3年前に立ち上げました。約1年前にNPO法人を設立し、半年前に千里ニュータウンの中に事務所を開設しました。

これまでは、住まいの相談、地域の高齢者住宅や人材などのデータベースの作成、高齢者住宅の見学会、住まいのセミナーや留学生を招いての交流会などを行ってきました。

主な活動は、住まいの相談と考え、料金表もつくりましたが、相談でお金をいただくことは難しい、お金を払って相談する文化が我が国にないことにすぐ気づきました。しかし、千里ではこれから公的住宅の建替えが進み、計画づくりや合意形成など、いろいろ難しい問題が生じるから、調査やワークショップなど地域の側に建ったコンサルティングによって対価を得て、組織を運営するとともに、“地域への還元”として住まいの相談を行うべきではないかと考えるようになりました。

今後は、これらに加えて、戸建住宅の活用(地域のサロン、グループリビングなど)、公的住宅の建替えに伴う引っ越しサポート、人々が集まる場所でのお出かけ相談などを計画しています。また、建替えによってニュータウンの風景がどんどん変わっていく中で、ニュータウン計画の原形をとどめる場所、すぐれた街並みや空間、みんなの思い出が詰まった場所や風景などの環境資産を再発見し、保全するなどの活動にも取り組みたいと願っています。

高齢化はなぜ問題か？

澤木

高齢化、コミュニティの再生、あるいは若者の流出を防ぐ、若い世代とのコミュニケーションといったテーマが皆さんから出たと思います。こういった

面から、こんな活動をしています、こういうことを考えているといった話を少しご披露いただければと思います。どなたからでも結構です。

中村(真美ヶ丘)

単純な質問ですが、高齢化はなぜいけないことなのでしょうか。分かっているようで、分かっていないと思うのですが。

澤木

高齢化はなぜ問題か。一晩ぐらいかかるテーマのような気もしますが、現状と取り組みをセットでご紹介いただけるとありがたいのですが。

西上(泉北)

泉北ニュータウン学会で大学の先生から面白い話を聞きました。泉北ニュータウンは3つの島に分かれていて、間に旧の村があります。断絶されている状態ですが、出来たときに団塊の世代が一挙に入ってきて、我々第2次ベビーブームの年代で2つめの山があって、その下に3つめの山が来ないといけないものが、ニュータウンの中には実はほとんどない。ところが、すぐ横の旧の村は3つめの山があるのです。同じエリアの中で、国土軸から外れていて利便性はあまり変わらず、ハード整備もあまりされていない旧の村の方が利便性は悪いにもかかわらずです。

これはなぜか。実は私も村の中で生まれた人間なのですが、岸和田の「だんじり」のような地車の祭が村の中にあり、地縁型のかかなり根強いコミュニティが相当影響していることが分かりました。さらに調べていくと、地縁型のお祭りコミュニティは連動していて、有名な岸和田のだんじり祭りの地域では、1990年代前半まで軽犯罪率がかかなり低かったという統計もあります。相当濃い地縁型の帰属意識が意外と根づいている。ニュータウンの中にあいったお祭りを入れるのは難しいのですが、そういったコミュニティの取り組みで住民の意識を根づかせることが重要な手法だと思います。

古谷(香里)

今の話には、私も全く同感です。私のニュータウン地域には、枚方市41万都市の中で、村の神社仏閣のようなものがないのです。公団住宅のサラリーマン社会のベッドタウンとして、1958(昭和33)年につくられたのですが、居住者の多くが定住して、

高齢化したために、ベッドタウンから変わってきています。言ってみれば、子どもから見れば、ここが故郷になってくる。ところが、残念ながらそこに伝統も文化も歴史もないということで、要はサラリーマン社会の縮図のような形で過ごしてきた地域です。

これでは、いつまでたっても地域はまとまらない。何かしようじゃないかというときに、いつも地縁型のだんじりの話を出すのです。それで今、私たちの校区で考えているのは、お祭りです。枚方市は七夕の発祥の地なのです。七夕は、仙台や平塚がかかなり有名ですが、本家は枚方です。渡来人が天野川(あまのがわ)を見て、故郷へ思いをはせながら過ごした地域ですから、この七夕祭をベースにして、これから新しい伝統をニュータウンの団地の中に創ろうと。それでまさしく岸和田の例が私たちのイメージとして残っているのです。これからの新しいニュータウンの文化、伝統をつくりたいと取り組んでいる最中です。

澤木

世代を超えて支えていく伝統的なお祭りのスタイルを地域につくって、それを核にコミュニティを活性化していこうという提案ですね。

富永(多摩)

私は個人的には高齢化はそんなに問題ないと思っています。子育てをしたお母さんたちの話を聞くと、みんな元気で働きに行き、昼間に誰も歩いていない街で公園デビューするくらい怖いことはないのです。現役を外れたおじいちゃんおばあちゃんが日なたぼっこしているような公園に、若いお母さんが子どもを連れて公園デビューする方が、防犯的にも、街の安全においても、本当にいいと思っています。

ですから、そろそろこの辺から、余生や第二の人生という言葉忘れて、生涯現役で働き方を多様化することがテーマになるのではないかと思います。

私がお預かりしている長池公園では、実験をいろいろしており、週3時間からパートで働けるボランティア、毎日6~7時間で働きに来てくれるボランティアの82歳になるおじいちゃんが元気いっぱいです。77歳の方は、毎日来るのですが、謝金程度で経理作業を全部やってくれます。でも気ままで、ちょっと体調が悪いと休みです。そういう健康した

い、晴耕雨読的な働き方を公園で実現している。

一方で学生が勉強しに来たいというと、時給 800 円ぐらいの交通費を払ってあげて、午前中 3 時間働いて、ニコニコ現金払いをしてあげて、午後は勉強をしていく。ですから、少子高齢化よりも、人口減少...人がいなくなる、頭数がなくなることのほうが、はるかに恐ろしいと思うのです。

もう 1 点。多摩ニュータウンもやはり「疑似定住」の人が多いのです。いずれはどこかにまた引っ越すのだからと親が思っている。これはとても子どもたちに対して失礼じゃないか。自分の子どもも多摩ニュータウンで生まれて、多摩ニュータウンで育って、子どもたちの故郷は親の故郷ではなく、自分が生まれたところにあるのです。

そのための 1 つの方法として、たまたまお預かりした長池公園には長池という湧き水の池があるのですが、そこに 700 年近く前に入水自殺をしたお姫様と 13 人の侍女の物語があることが口承でしかなかったものを、現在 NPO 法人に協力いただいて蘇らせることに成功したのです。夏までに出版しますが、そういったことをやることで、やはり愛着だとか、岸和田であれば「だんじり」であるとか、自分とこであればこういう歴史や伝統をみんなで学び合ったり、楽しんだりする中から、もっと定住意識が育ち、ニュータウンが普通の街になっていくのではないかと思います。

入江(明舞)

高齢化しても大丈夫だと私は思います。私たちは 45 名のボランティアで、会員は全部で 80 名ですが、年齢構成はほとんど 60 歳の後半から 70 代、一番長時間のボランティア活動をやっているのは 70 代です。私自身が 78 歳でして、1 日 12 時間の労働をしています。7 時 20 分に入り、まず昆布で出汁を取り、終わると昼食や夕食の配達をやるので、配達車にも乗ります。片づけて消毒を終わったら、夜の 7 時半から 8 時です。最初はいろいろトラブルが起りましたが、5 年目を迎えたら、この年齢でも環境に適應する力があるんだと、私も初めて知りました。若い人が環境に適應できて老人はできないと思っていたのですが、それは違うと実証できました。

家庭での「老々介護」が問題だということで介護

保険ができましたが、社会的に元気な高齢者は地域のためにサービス活動する、あるいは自分で自立していくことを考えました。男性が多い中で失礼なのですが、連れ合いに先立たれたとき、女性よりも残された男性は落ち込みます。やむなくそうなった高齢男性を引っ張り出そうと、男性料理教室を開発しました。巷で花盛りの男性料理教室とは違って、いろいろ調べて買い物するなど、自分で管理することから教える教室です。今年度は 1 月 27 日に、7 回の教室を終わりました。受講生から、またやってくれという要望があります。

1 人で生活できる男性、その人たちが地域にもっと出ていく、高齢社会ではそれをやっていかないといけない。サービスの受け手ではなくて、自分がアクティブに動いていく、そういう高齢者を増やしたいと考えています。



千里ニュータウン俯瞰

川竹(狭山)

元気な高齢者が多い街は、誇るべき街とっているので、そういう意味では高齢化は問題ないのかもかもしれません。しかし高齢者は、自治会の班長などの役が回ってきたときに、他の方の世話はできないから自治会を退会すると言われ、現実にやめられる方も多い。安全・安心な街にしていく自治会活動は、お互いの互助活動で成り立っているので、お年寄りが増えると、自治会を担ってくれる人がいなくなる。若い方がどんどん入ってくればいいのですが、残念ながら住民が年をとって、活動ができなくなっているのが実情です。

災害が起きたときのために自主防災組織をつくりましたが、阪神淡路大震災のような災害が実際に起きたときに、被災者を誰が助けに行くのか。高齢になったら、他人の面倒を見ていくパワーもなくなり、どうしようもなくなるのです。

だから高齢者が悪いのではなく、高齢化していった社会に生ずるいろいろなことが問題になってくるので、高齢化社会は具合が悪い。若い方が入ってきて新陳代謝し、いつまでも活性化していく街にしていけないといけなと思います。

谷川(千里)

高齢化しているのは、佐竹台もご多聞に漏れないのですが、私はやっぱり高齢化は悪くはないが、バランスが取れない年齢構成がいけないと思います。

私は最近、叱られるのを覚悟で「きわめて高齢者に優しい千里ニュータウン、若年層に厳しい千里ニュータウン」という言葉をわざと使っています。

高齢者の方々には、行政がいろいろなサービスを行っています。たとえば老人会組織を50人でつくと、吹田市の場合は、年間57,000円の助成金が入ってきます。理事会などを開催すると、旅行代理店が3つぐらい来て、こんなサービスさせてもらいますと宣伝する。高齢者の一番大きな話題は旅行なのです。お金も暇もある、そういう方々だから自治会には、ものすごく大きな戦力になるのです。

佐竹台では、建替えをやっているので、300戸あったところが100戸です。仮移転している人と本移転していく人があるのですが、一番たくさん出ていくのは若年層です。子ども、学童が3人しかいません。それでも子ども会活動を何とか続けようと、ボウリングに連れていったり、歓送迎会をやったり、いろいろなことをしているのですが、お母さんと一緒に来ても6人。これではどうにもならないのです。ですから、若年層に魅力ある街を創るためには、建替えは必要だと言っているのです。

私たちは、建替えにあたっては、お年寄りが住みやすい街をつくるように要望し、実際にいい街が出来ています。たとえば、車椅子同士がすれ違えるぐらいの立派な遊歩道です。こんなところに両側歩道は普通作りませんが、両側歩道のう上に道路は6mです。屋上緑化も初めてやりました。建築費が高くつくから、なかなか普通の建物では屋上緑化はしませんが、ずいぶん運動をして、あずまやも造りました。お年寄りが語りいできるようになっていきます。

それでは、子どもや若年層のために何をしたのか。実は何にもしていないのです。高齢者の場合は家賃

にも優遇制度があり、最終の家賃の半分でスタートして、10年ないし15年で段階的に上がります。ところが若年層には負担が重い。

毎月のように何軒かは出ていきますが、出て行くのは若い層です。本当に悲しい。その人たちに聞いてみると「実は居たいのですが、家賃が上がるから居られない」と言うのです。若年者の優遇家賃制度をつくらないといけな、要望していかないといけなと考えています。何とかバランスのとれた街にしていきたい。それが唯一の希望です。

古谷(香里)

私たちのところでも、若年層はどんどん流出していますが、不思議なことに、小さい子どもたちが増えている地区もあります。なぜかと詳しく見ると、1つは敷地を分割して、そこへ若い人たちが入ってくる。もう1つは、高齢化率が非常に低く、若い人口ボリュームをずっと保っている所が3カ所あることを発見しました。先ほどから近隣住区の話が出ていましたが、近隣住区のつくり方によって、バスに乗らなければいけないぐらい駅から遠いのですが、そこは若い子育て層が非常に多い。現地へ行ってみると、小学校、幼稚園、保育所、診療所、郵便局、スーパーが、きっちりと徒歩圏にあって、信号を渡らなくてもいいようにできている。まさしくニュータウンを造ったときの近隣住区理論が生きている。もう一度生まれ変わっているのです。「歩いて暮らせる街づくり」が世界的に1つの流れになっていますが、参考になればと紹介させていただきました。

澤木

ありがとうございました。後ろの席で増田先生が喜んでおられるようですね。

勝本(洛西)

洛西ニュータウンでは、約20年前、1小学校に1,500人ほどの児童がいたのですが、最近では流出が多い。当時の子どもは30歳ぐらいになり、今頃は地下鉄がニュータウンに入ると言っていたのですが、いまだに入っていない。そのために、若い人には、街としての魅力がない。ちょっとここへ行きたいとき、すぐに行けない。明日は市長の選挙なので変わるかと思うのですが。みんな将来は便利になることを目当てに入ったのですが、なかなかそうならない。

若い人が出て行かざるを得ないから、住宅は二世帯住宅になっていないのです。

谷川さんも話されたように、バランスの取れていない街は本当に魅力がないと思います。若い人たちが街に残りたい、面白いという感覚をつくるのが、私たちの1つの大きなテーマだと思うし、交通の問題もあります。あまりにも「いい街」過ぎて、きれいで緑豊かな街過ぎて、住民みんなが住み続けたいと言うものだから。それで若い人が入りたいと言うのだけど、入る所がないという感じもします。

住宅の問題も考えていかないといけません。まだ建替える時期に入っていないのですが、二世帯住宅を造ったほうがお年寄りのためにも、子どものためにもいい、ローンも親が払えば子は払わなくていいなど、住宅のあり方を考えていかないといけません時代に入ったのではないかと思います。

街の更新と若い世代の呼び込み

澤木

少し話題を建物や建替えにしていきたいと思いません。若者が入る場所、新規の方が入る場所の1つとして建替え後の住宅があると思うのですが、先ほどの谷川さんの話では、佐竹台で建替えをしていくと、従前の居住者の中で若い人が出ていってしまうという話がありました。一方、古谷さんの香里団地では、若い人は入ってきているが、中間層が抜けているというような話もありました。街の更新という観点から、奥居さん、いかがですか。

奥居(千里)

ニュータウン二世という立場から言わせてもらくと、この街は、40年前は30代の方が頑張っていて、30年前は40代の方が頑張っていて、20年前は50代の方が頑張っていて、結局同じ世代がずっと頑張っていて今日に至っている。

下の世代から見ていると、この街は面白いのかなと思うわけです。私は、たまたまニュータウン好きだから残っていますが、友達は皆、ニュータウンのすぐ外側に越していつています。本当は好きなのですよ、皆好きなのだけど、やっぱり親と一緒にいられないし、何かこの街はちょっと面白くないぞというところがあるのではないかと。

建替えで戸数が増えて、友達が帰ってきたり、あるいは同じ世代の新しい人が入ってくるのを私は待っているのです。そういうことをすごく期待しているのですが、高層化するといけないとか、そういう話になって、この街はいつも同じ世代がずっと牛耳っている。同じ世代がいつも牛耳り続けるのがニュータウンの1つの弊害じゃないかと気がつきました。いろいろな世代が混ざることの意図的にしながら造り替えをしていかないと、同じことが繰り返されると思います。

澤木

いろいろ反論が出そうですが...



ひがしまち街角広場(新千里東町)

今西(高蔵寺)

住み替え、建替えの問題から外れているかも分かりませんが、人口問題に端を発して、住民のふれあい、助け合い、支え合いという基本から考えていく必要があると思います。どんな問題を解決するにしても、何とか現状は現状で認め合って生きていこうという考え方をしないと、建替えなどは、我々の住民で考えると、お金もかかることですし大変です。それぞれの住民組織がもっと、ふれあい、助け合い、支え合いということをベースにして組織を形成していくことが、まず必要なのではないかと。

先ほどから「コミュニティ」や「自治会」などの言葉が出ますが、その定義がわりと曖昧です。コミュニティとはどういうことか、自治会とはどういうことかという定義づけから考えないといけません。

1973(昭和48)年に当時の自治省が「コミュニティ」という言葉を使い始めました。コミュニティをつくらうと。いわゆる戦時中の大政翼賛会に端を発した住民組織が崩壊して、何とかまた新しい組織をつくっていかなくちゃならないということで、当時の自治省が考えたのがコミュニティという言葉です。

そのときに定義されているのが、いわゆる個人をベースにした住民組織です。端的に言えば、自治会は世帯を単位にしているのです。それに対してコミュニティという言葉は、個人をベースにしている。これが大きく定義が変わる点です。そのあたり、5月にまた話を進めたいと思います。

中村(真美ヶ丘)

真美ヶ丘ニュータウンは、千里ニュータウンや泉北ニュータウン、大阪の賃貸マンションなどに住んでいた人が移り住んできた街です。私も泉北ニュータウンの原山台に10年ほど住んでいて、ソフトボールチームをつくったり、PTA活動をしていましたが、そういう人たちが集まった街で、まず何をしようか。故郷づくりをしよう。それにはやっぱりお祭りだということで、翌年から2日間にわたる大々的な夏祭りを、近隣の自治会に呼びかけて一緒にやっています。すでに23回やって、2日間で主催者発表が2万人という大きなお祭りです。小さいところでは正月のどんど祭りがあります。

コミュニティは、ネットワークづくりだと思うのです。いろいろな年齢層の人を集めて、いろいろな活動の場を与える。0歳から4歳の子どもをもっているお母さん方には、自治体と一緒に、子育て支援をやっています。年寄りの方には「いきいきサロン」を主体に、月2回、ふれあい喫茶でいきいきサロンをやる。それから、女性がバス旅行をするという行事もあります。まだ不足点がありますが、自治会が主導してネットワークづくりをするために、「真美ヶ丘」という8ページの広報紙を月2回出しています。今日、広報部長の上村さんも一緒に来ていますが、香芝市の広報よりいいと言われるぐらいの広報紙を発行して、これをキーにいろいろなネットワークづくりをやっています。いろいろな行事をやってくれる、子どもを守ってくれる、お年寄りを気にかけている、そういうふうに住民に喜ばれる自治会活動を行っています。建物についても、変な建物を建てて要らぬトラブルが発生することもないなど、いろいろな面でケアをしていますので、皆さんの古いニュータウンの方が悩んでおられることは今のところ発生していません。

いろいろなところに目配りをして、いろいろな階

層の人をいかにネットワークで集めていくか。成熟していない段階でいろいろなことを考えて、いろいろな街のルールを素早くつくるのが大切です。

いろいろな所から集まった人が真美ヶ丘ニュータウンのまちづくりをやってきたおかげで、今のところそんなに問題は発生していないのですが、かといって安閑としておられませんので、皆さんのご意見を拝聴しているところです。

澤木

香里では、若者たちはどういうところに魅力を感じているのでしょうか。

古谷(香里)

香里団地は、枚方市駅からバスで10分かかります。そういう立地では、本来なら建物を建てても若い人は入ってこないのですが、枚方市という街は、なぜか人が定着してきている。理由の1つはアクセスです。バスが夜の12時まである。特急が駅に停まる。京都と大阪の中間点である。こういったことが非常に便利だということで若者が入ってくる。

それからもう一つ、建替えて重要なことは、公的機関の建替えでは、建物そのものに魅力はないのです。ところが、URがもう建てないということで売った土地に民間の大手ディベロッパーが大きな大規模開発をする。ところがこれが安くて非常に魅力的。若い人に対してもローンを含めて非常に結構だと。まして、高齢の親が住んでいる場所の近くにそういうマンションができれば、子どもたちが住みつくということです。

もう一つ、高齢者がなかなか動かないのは、枚方市では小学校の校区の通学距離は600m以内が基準になっていますが、だいたい500m以内の範囲で生活が完結できるようになっています。先ほど申しあげたように、病院、看護介護施設、電気屋さん、食堂、公共施設が全部揃っている。それが便利で、水路をたどりながら商店街を散策できるという、先ほど増田先生がおっしゃったような地形になっているのです。そういったことを含めて、おそらく子ども、若い人にとっても魅力的な地域になっているのではないかと私は見ているのです。

人口統計があるんですが、1月現在で6歳以下0歳まで、毎年100人以上の子どもが待機しているの

です。小学校の児童数は今 518 名ですが、来年度は 100 何名入ります。たえず子どもが...次世代の人間が待機しているという状況です。

これはどこに魅力があるのか。どうもそういった交通アクセスの問題とか、住居が安く手に入るとか、親が住んでいるとか、こういうことが効いていると見ています。その中で世代間でも、今言われたようにお祭りをしたり、あるいはいろいろな行事を通じて、お年寄りには住みやすい地域ですが、子どもにとってはそうでもない。その中でお祭りをしたり、スポーツイベントをやったり、防災・防犯訓練を子どもも一緒に参加してやるなど、そういうことを考えながら取り組むことも必要でしょうね。

西上(泉北)

泉北ニュータウンでは、駅に近い公共用地の払下地に民間ディベロッパーのマンションができ、たしかに若い世代がたくさん入ってきて、高齢化率が非常に低い場所ができています。私も先ほどの奥居さんが言われたところに同感で、若い世代の方がそこに入ってきている理由が、おそらく利便性の一点だけではないか。すると、その子世代がまた育ったときには、次の世代はさらに人口が減少していきますから、さらに利便性の高い場所...都心の近くへどんどん移住してしまうのではないか。何か利便性を超えられるような街の魅力がその場に構築されない限り、どうしても若い世代の住み続ける場所にはなり得ないと思います。

そういう意味でも「だんじり祭り」みたいなものは、なかなか全員 100%が好きていうわけでもないでしょうし、聞くところによると岸和田なんか年間に何十万も払わないといけないという話もありますから、そんなところに住みたいという人もいれば、住みたくないという人もいるでしょう。やはり新しく子どもが生まれて結婚適齢期になって、結婚したときに奥さんが「ここに住みたい!」という魅力を感じるかどうか。これが大きなポイントだと思います。そういう意味でも自治会がすごく高齢になってきて、地域活動も福祉活動も高齢の 60、70 の世代ががんがんやっている。そこに新たな若い世代が地域の何か担える場所、選択肢があるかということ、ちょっと今のニュータウンの中にはないのかなと思います

ます。若い世代は、地縁型ってあまり好きじゃないところもあると思うのです。コテコテのところに住みたくないというのがあり、実際に私の地域でも子どもが少なくなって、PTA 活動や自治会活動は、あまりやりたくないという風潮が強いです。

そういう意味でも、希薄化したコミュニティが悪いのではなくて、何か新たな住まい手が選択できるライフスタイルみたいなものが、ニュータウンの中では逆に構築できるのではないのでしょうか。

たしかにニュータウンは、住区が、高層の賃貸であれば賃貸、高層の分譲であれば分譲、一戸建ては一戸建てとエリア分けがされているので、住む人にとっては、このエリアに行ったらこんな特色のライフスタイルがある。ちょっと離れた所であれば、市民菜園とか、団塊の世代より上の方が楽しく有意義に過ごしているような場所がある。何かそういうものを、おそらく増田先生は想定されていると思うのですが、選択肢が高められてニュータウンのブランド化ができるようなことがないと、私はニュータウンの活性化は上手く見出せないという気がします。



千里の絵はがき

井口(筑波)

お年寄りが増えてきた、だけどそのお年寄りは、若い人たちが魅力に思うような街を形づくることのできるかどうか、という話だったかと思います。

ひとつ最近とても素晴らしいと思った話があります。ひたちなか市の団地に生協の店があったのですが、食べ盛りの人たちが少なくなり、その店を団地で支えることができなくなったので、店じまいをしようとした。そのときに、店を引き継ぎますかという生協からの話があり、生協の活動をやってきた主婦たちが、店と建物を貰ったそうです。隣に 2,000 世帯の団地があって、そこの高齢の方たちが、食べ

る物も買えなくなったら困るのです。その話を地域は大歓迎して、110人の会員と80人のボランティアが、ものすごく多面的な活動をしているそうです。食堂、配食、喫茶、勉強会や子どもの生け花教室など、とても楽しそうな活動です。

レンタルボックスが並べてあって、その中で自分のものを売ったりもできるのです。商売が若い人にとっても面白いのではと思うのと、実際に若い人たちが子どもを連れて昼食や喫茶に来たり、ここは実家に帰ってくるようだということで、七夕だの何だの、いろいろな活動が毎日やられていると聞いて、本当にびっくりしました。富永さんの多摩でも、長池公園や長池ネイチャーセンターという拠点があるのは、住民にはものすごい助けになると思うのです。

近隣センターの店が出ていった所を、住民が商売やコミュニティ・ビジネスに...たとえばタダや非常に安価に活用することができたら、かなりのことができるのではないかと感じた事例でした。

お祭りや自治会、そういうことはもちろん大切ですが、1つ小さな場所でも、拠点というハードが提供されることはすごく大きなことだし、できることではないでしょうか。



街角の花壇(藤白台)

古谷(香里)

今のことに関連して聞いた話があります。商店街で寂れたシャッター通りがあって、その地域のコミュニティ協議会が「ブラットホーム」...要するにお年寄りがブラット入ってきて食事をしたり、お茶を飲んだり...そういう場を開設したのです。その後、継続するのは非常に難しいのですが、コミュニティ・ビジネスとして、お昼の食事を350円で提供する、コーヒーを100円にする、そういうことをしながら運営しているようです。行政からも最高300万かの補助があり、ビジネスが定着するまで5年間は

補助していく。その間にもちろん家賃75,000円を払うらしいですが、今のところは運営できているということでした。

私の地域でもお年寄りがしょっちゅう歩いているのを見るという話を聞きますと、立ち寄る店や場所が欲しいと思います。

「地縁型」と「テーマ型」の協調に向けて

澤木

先ほど高蔵寺の今西さんから、ベースの部分でしっかりした住民組織が必要だという話がありました。その一方で、泉北の西上さんの話のように、今の自治会や地縁的な組織は、上の世代がずっと支えてきていて若者は入りにくいのではないかということがあります。何か新しい、若者たちが地域の活動になれるようなプラットフォームが必要、あるいはそれは若者だけではなくて、お年寄りでもいろいろな活動を起こしていける。3番目に話題にしようとしていた、ニュータウン再生を支える市民活動の話に入ったようですので、さらに展開していただけますか。

古谷(香里)

私の校区では、子どもが非常に多くなっていくということで、PTAを中心にした研修で聞いたのですが、今や地域を無視してPTAは動かない、これからは「PTCA」だ、Cはコミュニティだと。

たとえば、子どもの見守り隊をやるのは地域、あるいは地域の高齢者です。そういうことを考えると、私たちはPTAと地域と学校が協働しながらやっています。やっていけば、自治会にも入ってくれる、コミュニティにも入ってくれるのです。

コミュニティの定義がよくわからないという話がありましたが、コミュニティの定義はある。一言で言えば、目的を共有する社会的状態。だから地域コミュニティは、地域づくりを目的とした組織です。その中にはもちろん個人もですが...地縁的な自治会、諸団体、PTA、福祉など、いろいろなものを全部含めてコミュニティを形成している。だから、この形を専門家に言わせると「形成概念」と言います。自治会は「存在概念」と言うわけですが...いろいろありますが、一般にはそういう言い方をします。そういう組織を使いながら、地域の若い人に入っていた

だいて、いろいろなイベントを行うと。

たとえば、防災訓練を3月の末にするのですが、あくまで子どもの校内についてはPTA、あるいはパパさん隊が中心でやってくださいと。あるいは小学校の先生がやってくださいと。そうすると、市民活動は自治会に入ったり、あるいはコミュニティの一員として頑張らなければならないということで、今、私たちの開成校区は取り組んでいます。

中村(真美ヶ丘)

私たちの真美ヶ丘自治会は、まず「防犯活動実施中」という防犯ステッカーを、各門扉に全部掲示してもらっています。コミュニティという点で、自治会が提案することについて、あるいは自治会へ提案したことについて、皆でどう取り組むか。自分はそこに住んでいて何か貢献しているということが、年齢を問わず、すごく大切です。

2つめは、花いっぱい運動。ある特定の場所に皆で花を植えると、維持管理が大変です。ですから、各家で一鉢、花を植えようではないかと。その鉢を道路沿いや門のところに出したうえで、この花いっぱい快適なまちづくりに参加していますというサインを立ててもらっています。

3つめは防犯パトロールで、動くステッカーとして、「防犯ストラップ」と「マナーアップ・ストラップ」。これを散歩、買い物、ジョギングのときに皆につけてもらっています。

地域コミュニティの誰もが、どこでも、手軽に、継続して、できる防犯活動、まちづくりということで、真美ヶ丘自治会では、特に「ついで」にできることを考えて提案して、これが相当定着して、皆さんに喜んでいただいています。この防犯ステッカーを貼りましたら、訪問販売のおかしな動きとか、そういうのが全然ありません。市や警察にも協力してもらって、警察の名前も電話番号も入れています。これを2年に1回更新してやりますが、これだと誰でもできます。お年寄りにこういう防犯ストラップをつけて散歩してもらおうと、まちづくりに自分も参加しているんだと、喜んでいただいています。

大海(西神)

ニュータウンには人口減少などいろいろ問題がありますが、神戸市の場合は、神戸市の副都心として、

この明石平野にニュータウンをつくろうという大構想が戦前からあり、1965(昭和40)年に発表して、地下鉄を引っ張って、神戸市が開発しました。

今日参加しているほとんどのニュータウンは府県や都市再生機構(旧公団)がやっている開発ですが、それは全部最終的には市町村と共有しないとイケない。千里ニュータウンも豊中市と吹田市に分かれています。神戸市の場合は地下鉄、小学校、水道まで全部市で一元化して管理しています。洛西ニュータウンに似た成り立ちで、もっと大規模です。

その中で大地震が起こった。そういうことを決して予測はしていなかったのですが、神戸市では仮設住宅を実に99%神戸市内に造ったのですが、それはほとんどこのニュータウンに造られています。ちょうど開発の予定地だった所です。この震災ではじめて、ガス、水道、水洗トイレ付きの仮設住宅ができたのです。その後は本格的な復興住宅も、この西神ニュータウンにも造られました。

西神ニュータウンでは、家もつぶれなかったし家族も安全だった、そういうことで復興にも全力で夜中までできた。ニュータウンがなければ、これだけの復興はできなかったのではないかと思います。

皆さんのニュータウンは全部、都市から離れたところに衛星都市として立地しているのですから、若者が住みたくなる街をどうするかという問題もあります。しかし、日本中どこでも地震が起こる可能性があるのですから、その中でニュータウンという場所は、各都市のバックアップ機能をもつ可能性があることを、ぜひ覚えていただきたいと思います。



太陽の塔(万博公園)

奥居(千里)

お配りしているプログラムの表紙を見ていただきたいのですが、去年北千里駅前写真展をやりました。建替えてニュータウンの景色がどんどん変わっ

ていくし、私は神戸に親戚もいたので、景色を失うことはとても悲しいことだろうと、震災のあと思ったのです。

建替えて景色が変わるといふときに、やっぱり記憶にとどめておきたい。あと最初から住んでいる人も面白くて、新しく来た人も面白って何だろうって考えて、定点観測がいいんじゃないかと、古い写真をたくさん撮っておられる方から写真を借りてきて、同じ場所に行って私が現在の写真を撮りました。

これは非常に好評で、まず場所を探すのが非常に楽しい、見比べて楽しい。それから同じ場所で四季を追って撮ったりすると、これがまた面白い。古い写真はモノクロ、新しい写真はカラーという形で、よく「昔はこんなだったのか」とって、若い人は面白いし、最初から住んでおられる方は懐かしいということで、写真展はお金もそんなにかからないし、そういうアイデアがいるのだらうと思います。



緑道で工作(こぼれび通り)

澤木

地縁的な組織だけではなくて、奥居さんのようなニュータウンの新たな魅力を、そういうテーマで切り取って発信していく活動が千里でも起こっているのですね。

「地縁型コミュニティ」とNPOなどの「テーマ型コミュニティ」の関係について、こうあったらいいんじゃないかという話を、多摩の富永さんからご披露いただければと思います。

富永(多摩)

ちょっと話題からそれますが、人間の行動はやはりハードに縛られる部分がありますので、ハードを建替えるっていふときに、またもう1回画一的な、3LDKなら3LDKばかり造るのではなくて、1LDKから3LDK、いろいろな形が欲しい。特に公的な賃貸住宅を建て替えるときには、分譲してほしい人には分譲

してあげる、賃貸してほしい人には賃貸してあげる、広さが要らない人には要らないように、広さが欲しい人には欲しいように、そういうことをコミコミで多様なハードを用意すれば、多様な人たちが引っ越してくるのではないかと。

これが歴史的にゆっくり開発された街であれば、先にソフトの多様性がゆっくりやってきて、徐々にハードが多様化するんでしょうが、我々が今話題にしているニュータウンはハードが先行するわけですから、ハードを建て替えるときに心して多様なハードを用意すると、多様なコミュニティ形成ができる多様な世代がやってくる。多様なものと多様なもののコミコミこそが、ひとつのあたりまえの普通の街になっていく方向性じゃないかなと思うのです。

私はNPO活動をやっている、暮らしの支援事業というコミュニティ・ビジネスも得意ですし、行政との連携も得意ですし、企業との連携も得意です。ところが、多くの地縁型組織の方々にとっては地域で信用力があって、防犯活動だとか、いろいろやられているが、なかなか人気がないとか、専門性が必要なことになるのが苦手ということがあります。

でも、考えてみればそこには必ず自治会館とか町会館があって、わが街には月に1回ぐらいしか使われていないハードの場所があるんです。それを町会の人に頑張って使ってもらいたいじゃないですかと「あるべき論」を言ってもしょうがないので、隣の町会に、ある提案をしています。ハードとして持っている町会館を、我々NPOに貸してくれませんか。そうしたら町会の人たちの利便性向上のためにコミュニティ・ビジネスをやりますからと。それだけではなくて、行政サービスの取り次ぎもやりましょう。明舞の入江さんのようなNPOがやる配食サービスなどの取り次ぎをやりましょう。わが街には京王電鉄があるから、京王電鉄がビジネスでやってくれるような有料のサービスがあるならば、そういうものも取り次ぎましょうと。

そういうことを日常的にやっていけば、震災といった「有事」のときに、いつでもそこがオアシスのようにたまり場になっていたおかげで、皆がそこを中心に活動拠点として活動ができたね、よかったねと言われるのではないかと。平時は、皆で仲良く取次

店サービスを自治会館や町会館でやったらどうかと。それを町会の人だけに押しつけるのではなくて、持てる者と持てる者、プラスとプラスを足し算するという考え方で、NPOと町会で契約しませんかという話をしたら、国交省は喜ぶ、八王子市は喜ぶ、何か支援策も出てきそうな機運もあって、来年度事業になりそうな気配もありますので、モデル事業として、今度の5月にまた発表できればいいと思っています。

西上(泉北)

テーマ型コミュニティの話ですが、私たちの地域でも、自治会とかPTAの役員のなり手がなくて、やっている人はどんどん仕事の負担が大きくなっている。これはあまり大きな声では言えないのですが、行政も自治会にどんどん仕事を下ろしている。仕事が増えていく、人数減っていくということで、そんな自治会に入りたくないよねというのが、多分奥居さんや私らの年代代だと思います。

地縁型の組織が仕事をどんどん増やしていくと、住民の負担がどんどん増える。そうではなくて、私も富永さんのような感じで、地元でNPOをしていますが、自治会の加入率が下がる一方、テーマ型の市民活動やボランティア活動がどんどん増えているのです。毎年のようにNPOができて、雨後のタケノコのようにどんどん増えています。

そういうものを見てみると、テーマ型でそれぞれ楽しくやっている。共通する趣味の分野で、何か社会貢献をやっているような団体がどんどん、いっぱいできる。地縁型の組織は、防犯、福祉、子育て...そういったことは当然重要なテーマで、必ずやっていかないといけないと思うのですが、一方で、住民同士が趣味で集まれるようなテーマ型の仕組みをどんどん高めていって、地縁型の組織とうまく結びつけるネットワークの工夫が必要かなということで、うちの学会にもコミュニティ部会という勉強会があります。去年から「緑の集い」を開催し、大きな公園を活用して、地産地消型のいろいろな市民菜園をやっている団体さんとか、そういった活動団体が一堂に集まれる祭典を1回やろうということで開催しました。非常に集まりがよくて、みんな積極的に動く。そこに地元の大学の学生も入って、初めての祭りだったんですが、実行委員会のメンバーが、学生

も入れて総勢100名ぐらいになって、非常にみんな活発に率先的に動いて、何かそういう「地縁型」と、新しい...たぶん富永さんが進めておられるような「テーマ型」の組織がうまく融合したネットワークがつくれれば、私はいいニュータウンの再生になるのかなと、この祭りに期待しています。



千里南公園

澤木

ありがとうございました。最後にいい話をしてくださりました。

今日、たくさんのニュータウンの方々がお集まりいただきました。人間の一生で言うと、生まれてから死ぬまで、幼年期、少年期、青年期、壮年期、老年期と進みます。縁卓会議を千里でやるということで、壮年期、更年期に入ったニュータウンをどうするかという主題から入るという意識があったので、最初に高齢化というキーワードを投げたのですが、高齢化は悪いことかという話から始まりました。

高齢化自体が悪いのではなくて、高齢化していくことによって、地域のバランスが保てなくなる。地域運営ができなくなっていくことに不都合が出てくる。では若い世代を呼び込んでバランスを戻していくためには、いろいろな仕組みが要るよということで、これまでの伝統的な地域で行われているような、世代間がそれぞれ役割分担をして支えている「お祭り」といった仕組みとか、あるいはもっと単純に若者に対する魅力...利便性という話がありましたが、現状では敷地分割されて、小さな区画で安くして売っていけば入るといふところもあると思いますが、そういったところにもまた問題が生じると思います。若者が地域を担っていくときの活動の場の話が出て、最後のほうでは「テーマ型」のコミュニティみたいなもの、自分たちが好きに積極的になれるような活動が展開しているような場があればいいのではない

かと。そういったものと、地域をベースで支えている自治会であるとか、「地縁型」の組織とのつながりもこれからは考えていく必要があるんじゃないかと、最後に西上さんがまとめてくださいました。

今日はいろいろなニュータウンから来ていただいているので、かなり違う視点での話が飛び交うのかなと思っていましたが、わりとニュータウンの将来像では、皆さん同じようなベクトルをもっているという印象を受けました。

ニュータウンは、計画的につくられたがゆえに、制約条件になっているところもあるかもしれませんが、豊かな公共空間、都市基盤、ずっと培ってきた住民の人間関係...そういったものがあって、それを十分に生かしながら、「ニュータウンだからこそ」という、これからの展開があるのだらうと思います。

先ほど大海さんが震災のときのバックアップ機能をニュータウンが担ってきたというご紹介をされましたが、ニュータウンならではの新しい 21 世紀型の街の展開を、次の第 3 回縁卓会議...高蔵寺で行われますが、そういった場を通じて、具体像がどんどん見えてくることを期待して、フォーラムを終わりたいと思います。熱心な情報提供、意見交換をいただき、ありがとうございました。(拍手)

司 会

おそらく皆さん、時間も短く消化不良だと思いますが、今日こうして集まって出会いがあったことが、一番の大成功だということで、出会いをお土産に各ニュータウンにお持ち帰りいただきたいと思います。

全国規模のニュータウン同士のネットワークは、なかなかお金も暇もかかることです。例えば、関西圏なら関西圏だけのニュータウン間の交流とか、関東圏は関東圏、中部は中部でと、そういった地域交流もこれを機会にできたらと思います。

今日は報道関係もたくさん入っておられます。関西テレビ、福井テレビ、吹田ケーブルテレビ、朝日新聞、読売新聞、産経新聞...またニュースや記事をご覧いただければと思います。

山本(千里)

主催者側を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

今日は、皆さん遠いところから、会場いっぱいになるまでご参加いただき、ありがとうございました。



ニュータウンは「計画的に」「大規模に」「比較的短期間に」つくられたために、非常に整然とした美しい街が出来あがりましたが、それがまた逆に災いにもなり、いくつかの問題も出てきました。特に千里は最初でしたので、これまでいろいろなことが議論され、国際会議を含む会議も多数開催されてきました。5年くらい前までは、こういう会議は行政が企画して、そこに大学の先生方が参加する形が多かったのです。ところが千里でも5年くらい前から、市民がこれに参加するというよりも、最近は市民が行政と一緒に企画して、そこに学生や先生方、専門家の方々にも入っていただく形をとるようになりました。世の中全般にそういうふうになってきていますが、ニュータウンでも大きな流れだと感じています。今日このような形で一昨年に引き続いて会議を開くことができ、ありがとうございました。

ニュータウンにはいろいろな問題がありますが、私も千里ニュータウンの中に事務所を開いて、季節の変化をながめていく中で、やっぱり千里ニュータウンは素晴らしい、つくづくいい街だなと感じながら過ごしています。

それぞれのニュータウンにそれぞれの経験があり、その経験を踏まえて培われた知恵があり、いろいろな活動が出てきていると思います。これを機会に、全国のニュータウンが付き合い、交流を続けて行けたら、もっと素晴らしいと思います。

今回のこの縁卓会議を開催するにあたっては、非常に短期間でありましたが、谷川さんをはじめ実行委員の皆さんが本当に集中して、力を結集して企画をすることができました。その陰にはまたいろいろな個人・団体の方々のご協力、協賛がありました。心からお礼を申し上げたいと思います。

今日この会議のために基調講演をいただいた増田先生、コーディネーターを務めていただいた澤木先生にも、改めてお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

5 参考資料

プロフィール

講師

増田 昇（ますだ のぼる）

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科教授。1977年大阪府立大学大学院農学研究科修士課程終了。市浦都市開発建築コンサルタンツでニュータウンの計画・設計に携った後、1985年大阪府立大学農学部助手、1997年教授。緑地やオープンスペースを対象とするラundsケープ・アーキテクチャが専門。近年は「千里ニュータウン再生のあり方検討委員会」委員、「千里ニュータウン再生シンポジウム」パネリストなど、再生の取組みに関わっている。主な著書「住環境の計画3（住環境とラundsケープデザインの章）」など

コーディネーター

澤木 昌典（さわき まさのり）

大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻教授。1982年大阪大学大学院（環境工学専攻）修士課程修了。財団法人 関西情報センター、兵庫県立人と自然の博物館、姫路工業大学 自然・環境科学研究所を経て、大阪大学大学院工学研究科講師。助教授を経て、2004年より教授。専門は、都市計画・都市デザイン。大阪、堺、吹田、箕面、尼崎などにおいて、学生の演習としてのデザインサーベイとまちづくり提案、まちづくりや環境保全等に関する市民・企業・行政などの活動の支援のほか、子どもを対象にした環境学習農園など、地域との交流に積極的に参加している。著書「地域環境デザインと継承」（彰国社、共著）、「都市のり・デザイン」、「都市デザインの手法（共に学芸出版社、共著）」など

フォーラム出席団体・出席者

出席者名 所属団体名 ニュータウン・団地名（都府県）	団体の活動概要
井口 百合香 NPO法人つくばアーバンガーデニング 筑波研究学園都市（茨城県）	花と緑をとおして、市民がまちづくりの主人公となるしくみをつくらうと活動してきた。公園に建設した園芸セラピー花壇を拠点とする活動、大学と連携した桜草里親制度、100本のクリスマスツリーの開催などのプログラムに取り組んでいる。 http://www5e.biglobe.ne.jp/tug/
岩波 嶺雄 CROSSつくばアーカイブズ研究会 筑波研究学園都市（茨城県）	変化の激しいつくば地域において、生活・建物・自然・習慣などの地域資源の散逸を防ぐため、古写真、周年誌などの収集を行っている。昨年第1回「つくばアーカイブズ大賞」を開催し、一般市民から古写真を募集。貴重な写真を掘り起こすことができた。
富永 一夫 NPO法人エヌピーオー・フュージョン 多摩ニュータウン（東京都）	多摩ニュータウンにおける暮らしの支援事業。 http://npo-fusion.jp/index.htm
今西 實 春日井市コミュニティ推進連絡協議会 高蔵寺ニュータウン（愛知県）	市内14コミュニティ推進地区にて構成。研修・連絡調整・先進地視察等々の他、行政等との関わりをもっている。高蔵寺ニュータウン地区に5つの推進地区がある。今年5月に開催の「第3回ニュータウン人縁卓会議」に向けて実行委員会を設置して取り組みをしている。 http://www.geocities.jp/comuren/

<p>勝本 竹彦 洛西ニュータウン創生推進会議 洛西ニュータウン（京都府）</p>	<p>洛西ニュータウンのまちづくりビジョンを住民主体によって実現するため、自治連合会代表者による洛西ニュータウン創生推進委員会を発足。「環境」「安心して心豊かな子どもを育てる」「コミュニティの活性化」「生活機能の向上」の4部会を設置し、検討を行っている。http://www.city.kyoto.lg.jp/nisikyo/</p>
<p>中村 信夫 真美ヶ丘自治会 真美ヶ丘ニュータウン（奈良県）</p>	<p>香芝市と広陵町にまたがる、世帯主の大部分が大阪へ通勤するニュータウン。「なかよく、住みよく、くらしよく」をスローガンに結成して24年になる約1500世帯の自治会。2日間にわたる夏まつりや正月のとんど祭りなどを通じて「みんなが住みたい街、住んでよかったといえる街の実現をめざしている。http://www.mamigaoka.com/</p>
<p>大海 一雄 西神ニュータウン研究会 西神ニュータウン（兵庫県）</p>	<p>平成15年に大学の公開講座のOB会のような形で発足。その後ニュータウンのあらゆるテーマで毎月例会を開き、今月で60回目を迎える。会員は研究者、コンサルタント、自治体職員、高齢者など多彩。</p>
<p>入江 一恵 NPO法人ひまわり会 明舞団地（兵庫県）</p>	<p>「食」を通じた福祉コミュニティづくりを基本理念として、独居、虚弱高齢者対象の配食、ふれあい食堂における昼食サービスを実施。週4日、一日100食を提供。独居男性高齢者の自立をサポートするために料理教室を開設。http://npohimawari.com/</p>
<p>古谷 學 開成校区コミュニティ協議会 香里団地（大阪府）</p>	<p>開成校区コミュニティ協議会は香里団地の2/3を管轄。都市再生機構が初の大規模団地建替えを行ったが、機構の民営化の影響で当初計画と地域の様子が大きく変わり、地域をまとめるのが大変であった。 http://comm.city.hirakata.osaka.jp/comm/pages/gp/kaisei/</p>
<p>西上 孔雄 泉北ニュータウン学会 泉北ニュータウン（大阪府）</p>	<p>市民・市民団体、研究者・専門家、自治体の連携を重視して、建設的で創造的な地域づくりをめざしている。若者から高齢者までが参加して、異世代間で活気ある交流が生まれる学会をめざしている。 http://www.senbokunt.jp/</p>
<p>川竹 了 狭山ニュータウン自治会 狭山ニュータウン（大阪府）</p>	<p>昭和26年に設立された会員数約950世帯の自治会。会報誌やホームページで情報発信を行い、各種活動も行っているが、高齢化率が37%を超えて高齢者の活性化と少子化対策が重点課題になっている。 http://www15.ocn.ne.jp/suzukake/</p>
<p>日下 恵子 彩都コミュニティひろば 国際文化公園都市<彩都>（大阪府）</p>	<p>彩都住民のコミュニティづくりを支援している。</p>
<p>奥居 武 ブログ：アラウンド・藤白台 千里ニュータウン（大阪府）</p>	<p>1964年から千里ニュータウンに住むニュータウン二世。吹田市立博物館「千里ニュータウン展」（2006年）に市民委員参加。写真展「アーカイブ北千里」（2007年）をディオス北千里専門店会と開催。吹田市立博物館「吹田のアルバム展」「07EXP070 - わたしと万博」企画にも参加。ニュータウンを考えるブログ「アラウンド・藤白台」発信中。http://senri-g1964.at.webry.info/</p>

谷川 一二 佐竹台連合自治会 千里ニュータウン（大阪府）	佐竹台は千里ニュータウンで最初に開発され、再生でも先陣を切る住区。建替え問題では[佐竹台方式]と呼ぶ関係主体が一堂に会して意見交換するラウンドテーブルによって、膠着状態にあった建替えを住民合意の上実現した。竣工時には「第2のまちびらき」を開催。社宅の分譲マンションへの建替えや府営住宅の建替えにも取り組んでいる。
山本 茂 NPO法人千里・住まいの学校 千里ニュータウン（大阪府）	千里ニュータウン居住者が安心して住み続けられる住まいづくり、地域づくりのために、住まいの相談、調査研究、研修、住まいづくりを進め、千里ニュータウンの持続可能な街づくりに寄与することを目的としている。平成18年度「全国都市再生モデル調査」採択。 http://www.hnpo.comsapo.net/weblog/RedirectServlet?npouURL=sss

協賛者ご芳名、実行委員会

協賛者ご芳名（敬称略）

赤井 直	伊富貴順一	尾浦芙久子	大津 忠明	岡田 篤司	奥居 武
片岡 誠	勝本 竹彦	加福 共之	喜多 佑実	倉田 誠	小山 修三
直田 春夫	谷川 一二	永田 昌範	中野 寛成	藤本 輝夫	札幌 治男
増山 武彦	山本 茂	丸尾 誠一			
大阪府職員有志一同		大阪府住宅供給公社職員有志一同		吹田市役所職員有志一同	
吹田市立博物館職員有志一同		豊中市役所職員有志一同		吹田千里ライオンズクラブ	
独立行政法人都市再生機構		株式会社大阪誠建		株式会社生活科学運営	
千里ニュータウンFM放送株式会社		大和ハウス工業株式会社			

第2回ニュータウン人縁卓会議実行委員会

赤井 直（ひがしまち街角広場）	伊富貴順一（千里市民フォーラム）
大津 忠明（千里竹の会）	尾浦芙久子（財団法人吹田市国際交流協会）
奥居 武（アラウンド・藤白台）	岡田 篤司（都市づくり参加市民の会）
片岡 誠（NPO法人千里すまいを助けたい！）	加福 共之（千里井戸端ネット）
倉田 誠（千里市民フォーラム）	直田 春夫（NPO法人NPO政策研究所）
谷川 一二（千里市民フォーラム）	永田 昌範（南千里地区自治団体協議会）
藤本 輝夫（千里まちづくりネット）	山本 光平（北千里地域交流研究会）
山本 茂（NPO法人千里・住まいの学校）	丸尾 誠一（NPO法人千里市民ネット）

2008（平成20）年4月30日
第2回ニュータウン人縁卓会議実行委員会

発行責任者：谷川 一二
編 集：奥居 武 山本 茂
事 務 局：吹田市佐竹台1-5-A30-108
TEL 06-6871-9059（谷川方）